

金井紫雲編

藝州資料

K231

35



81457851



猫

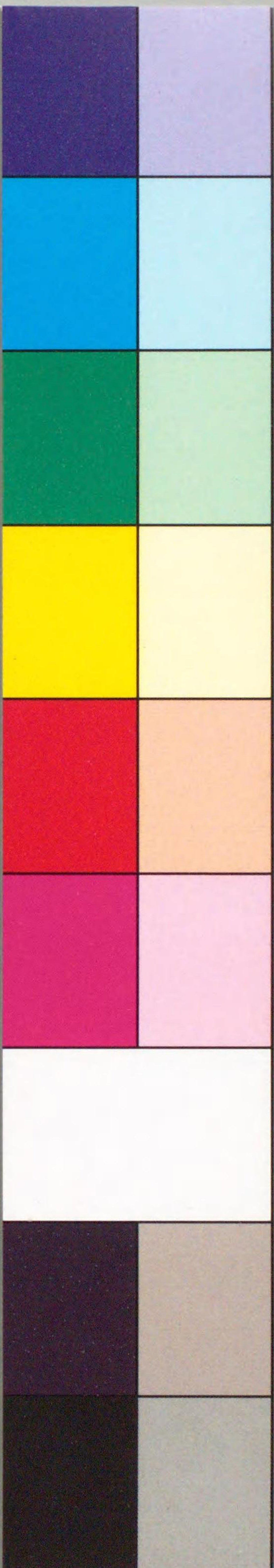


第三期 第六册

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# 藝術資料

第三期  
哺乳類篇

## 第六册 『猫』

### 目 要 目

狩野元信筆	麝香猫圖(大德寺傳)(原色版)
宣宗皇帝筆	麝香猫圖(玻璃版)
徽宗皇帝筆	麝香猫圖
沈南蘋筆	蜀香靈猫圖
錢舜舉筆	蜀香靈猫圖
許迪筆	草花捕鳥圖
小栗宗丹筆	枇杷群鳥圖
小栗宗丹筆	枇杷群鳥圖
雪村舉筆	芍藥猫圖
圓應山舉筆	竹藥猫圖
渡邊華山筆	睡猫圖
椿椿山筆	雀仔睡猫圖
傳野山樂筆	親雀仔睡猫圖
般元山樂筆	杉猫圖
橋本邦筆	神猫圖
岸竹堂筆	猫圖
菱田春草筆	黑猫圖
小林清親筆	畫室の猫
小田蘭素描	畫室の猫
岡本東洋攝影猫の寫真	畫室の猫

### 本 文

猫の概説	二
猫の歴史	三
猫の文獻抄	四
黒猫御愛撫	六
女三宮の猫(源氏物語)	七
猫恐の大夫(今昔物語)	八
隨筆に現はれた猫	一〇
侍従大納言の猫(更科日記)	一三
粟津原猫鼠論(曲亭馬琴)	一三
猫の賦(太田南畝)	一四
猫の一名作	一六
猫の忠節報恩説話	一八
猫の怪奇譚	二一
大猫の怪	二五
麝香靈猫	二六
猫の畫題風物	二八
歌舞伎の猫	二九
漢詩の猫	三〇
猫の和歌	三一
猫の俳句	三三

麝香猫圖



大德寺傳 狩野元信筆



# 藝術資料

第三期  
哺乳類篇

## 第六冊『猫』

### 要目

狩野元信筆	麝香猫圖(大德寺傳)(原色版)
宣宗皇帝筆	麝香猫圖
徽宗皇帝筆	麝香猫圖
沈南蘋筆	蜀葵猫圖
錢舜舉筆	蜀葵猫圖
許雍筆	草花群鳥圖
小栗宗丹筆	枇杷猫圖
小栗宗丹筆	枇杷猫圖
雪村粟筆	芍藥猫圖
圓應山舉筆	睡竹猫圖
渡邊華山筆	驚雀猫圖
椿華山筆	雀戶仔睡猫圖
傳野山樂筆	杉猫圖
般元邦筆	神猫圖
橋本雅堂筆	猫圖
岸竹堂筆	猫圖
菱田春草筆	黑猫圖
小林清親筆	室の猫
小スタンプ素描	畫室の猫
岡本東洋攝影猫の寫真	猫の寫真

### 本文

猫の概説	二
猫の歴史	三
猫の文獻抄	四
黒猫御愛撫	六
女三宮の猫(源氏物語)	七
猫恐の大夫(今昔物語)	八
隨筆に現はれた猫	一〇
侍從大納言の猫(更科日記)	一一
粟津原猫鼠論(曲亭馬琴)	一二
猫の賦(太田南畝)	一四
猫の名作	一六
猫の忠節報恩説話	一八
猫の怪奇譚	二二
大猫の怪	二五
麝香靈猫	二六
猫の畫題風物	二八
歌舞伎の猫	二九
漢詩の猫	三〇
猫の和歌	三一
猫の俳句	三一

麝香猫圖

大德寺傳 狩野元信筆





瀨  
香  
菴  
圖

大  
德  
寺  
繪  
卷  
裡  
天  
計  
筆





新のメッキ  
小田原  
林田  
清春  
親年  
筆  
畫  
の  
寫  
真

大島幸新  
和  
裡  
元  
計  
筆



麝  
香  
猫  
圖

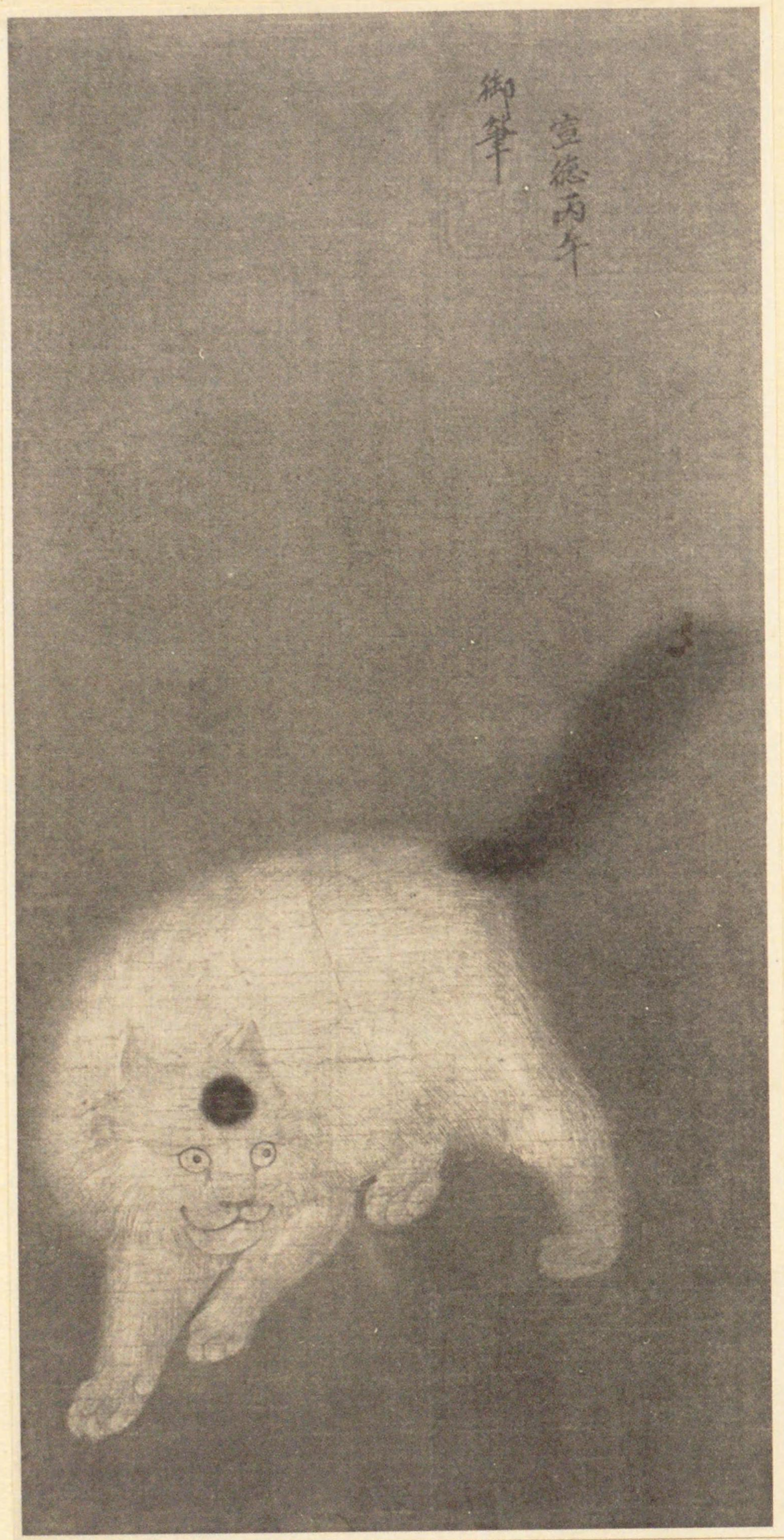
宣  
宗  
皇  
帝  
筆



麝  
香  
猫  
圖

宣  
宗  
皇  
帝  
筆





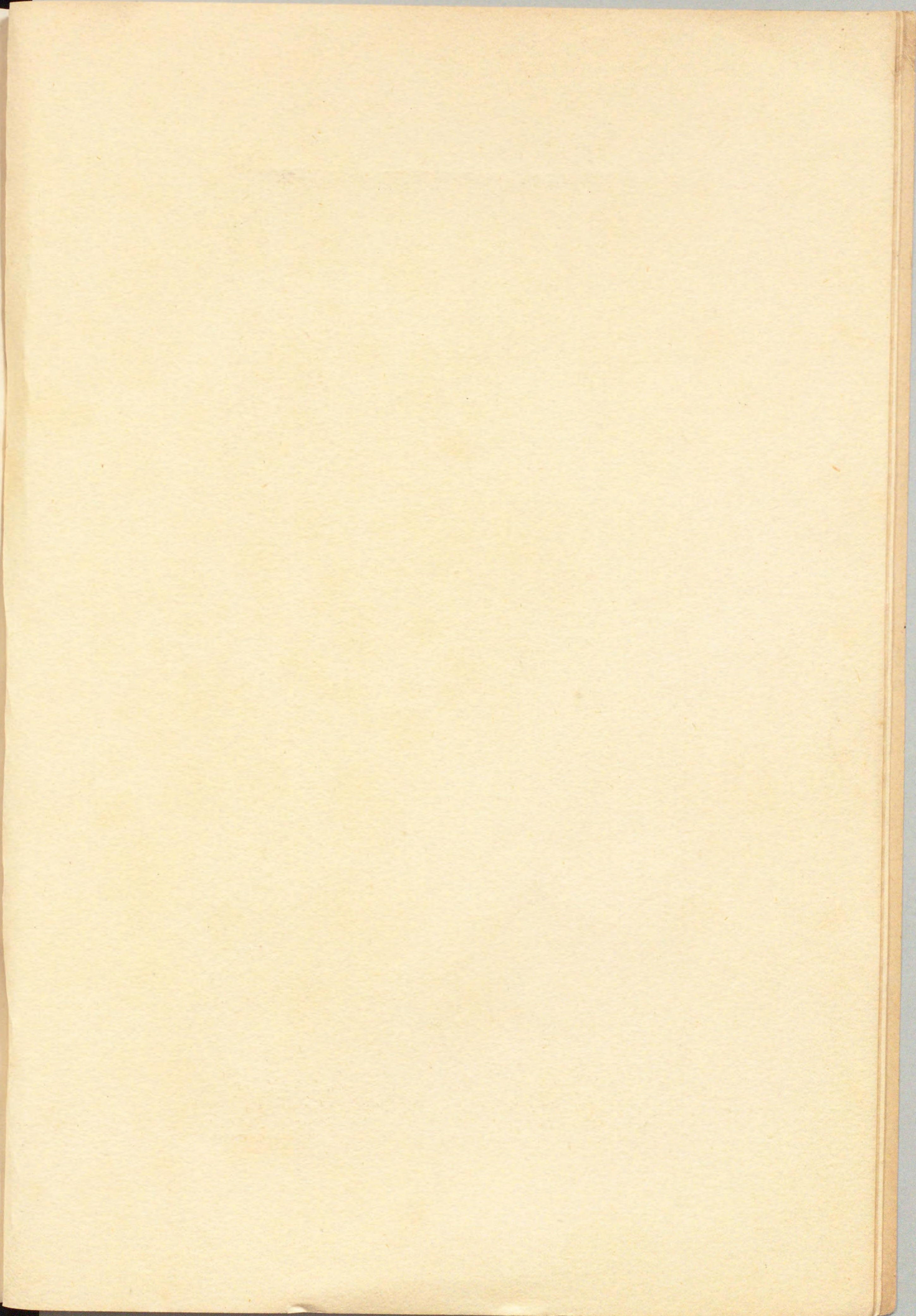
御香齋圖

宣宗皇帝筆





華 帝 皇 宗 徽  
猫 香 磨







靈  
香  
靈  
貓  
圖

玉  
樂  
筆





辛酉年  
沈南蘋  
畫

蜀葵  
貓  
圖

沈  
南  
蘋  
筆





猫  
捕  
鳥  
圖

錢  
舜  
舉  
筆





筆 迪 許 圖 猫 群 花 草





枇  
杷  
猫  
圖

小  
栗  
宗  
丹  
筆





竹に猫圖

雪村筆



芍薬猫圖

小栗宗栗筆





筆舉應山圓

圖 猫 睡





驚雀睡猫圖

渡邊華山筆



猫親仔圖



皮毛斑駁瓜牙堅食有鮮  
 辨卧有絕海客佳能知黑暗  
 舟人自愛音鳥圓座芽製  
 帶非同品捕鼠脚蟬是獨  
 權却尖老狸誇王面意還男  
 鏡得盤旋

己丑初冬瀉并錄  
 存齋詩

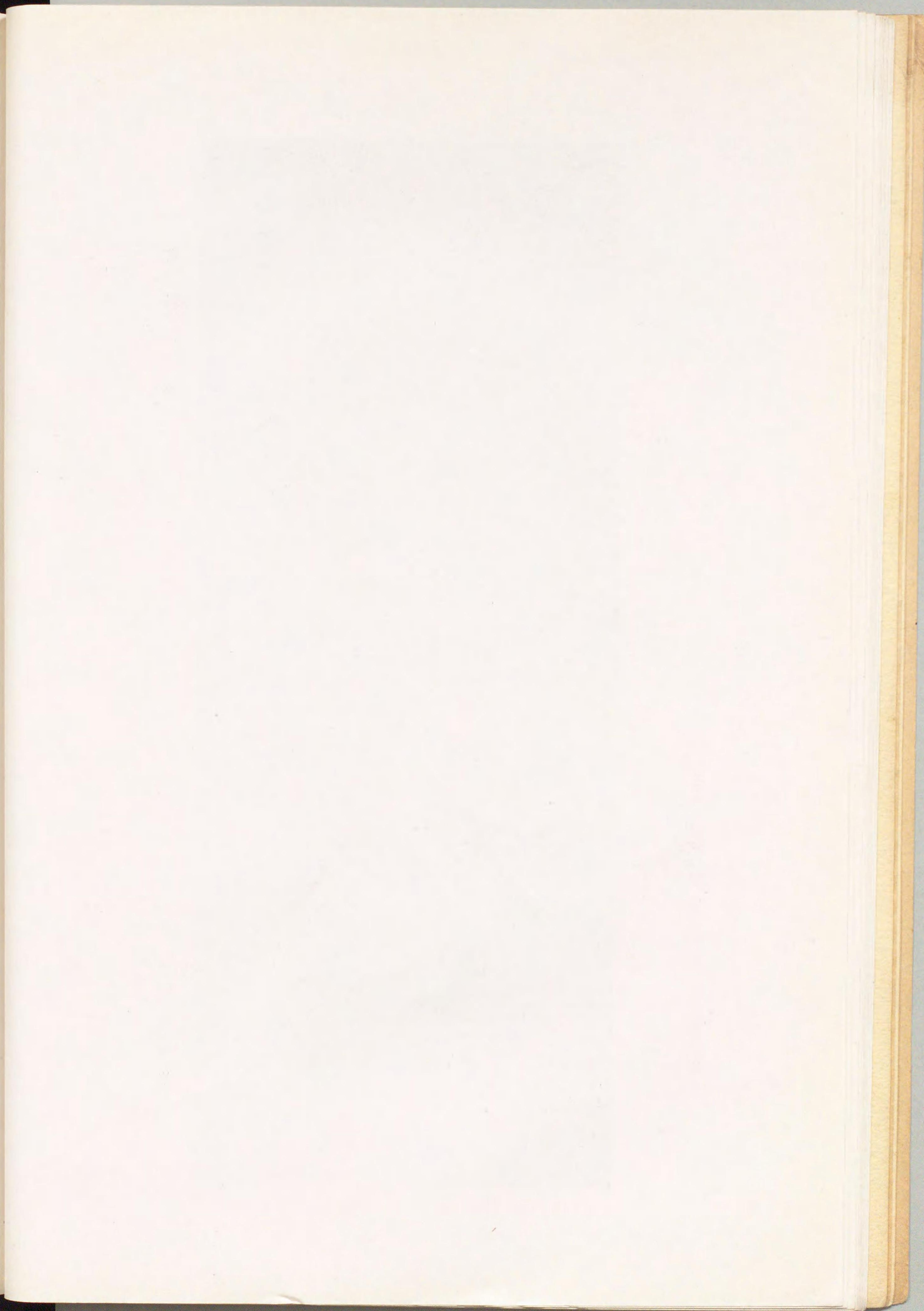
吳璠  
 以畫  
 卷書  
 林山筆

林山筆





筆 墨 山 野 狩 傳 猫 戶 杉







神  
猫  
圖

殷  
元  
良  
筆





猫  
に  
竹  
圖

橋  
本  
雅  
邦  
筆





猫  
圖

岸  
竹  
堂  
筆





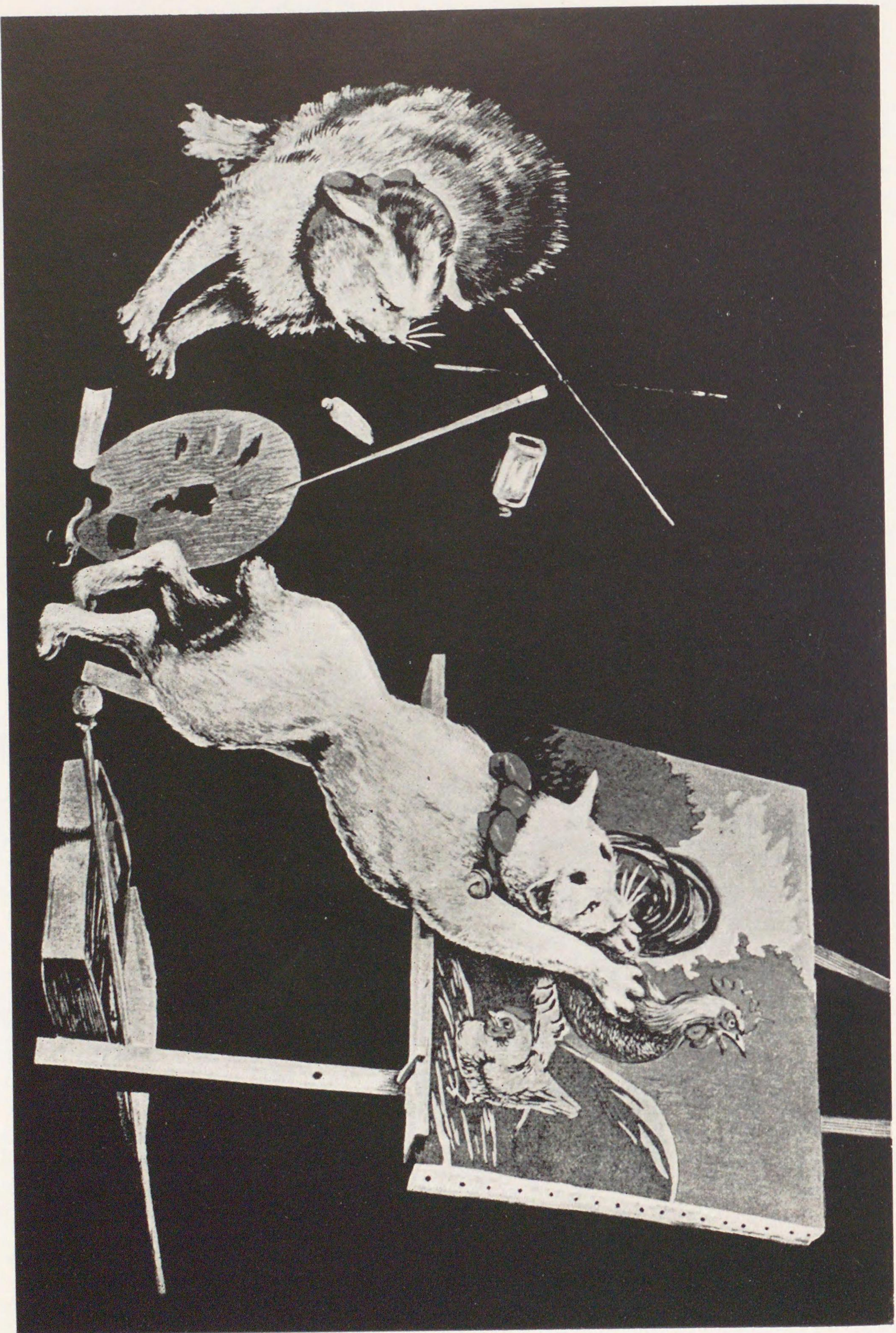
黒

猫

菱田春草筆

春草





筆親清林小 猫の室畫

-----





描素ソラッタス





影 攝 洋 東 本 岡



編雲紫井金

料資明藝

册六第 篇類乳哺 期三第  
猫



行刊堂艸芸 會社 台名



## 猫の概説

猫は世界各地に家養されてゐるが、これを學術上唯一種と認める事が出来るか否かは問題である、歐洲に於ける猫は、アフリカの野猫(又ビア猫、一名エジプト猫)から由來するものと、印度西部の野猫(ベルシヤ猫)から由來したものゝが主な祖先であつて、その間に雜交が行はれたり、又更に歐洲産野猫(モリ猫)の血も入つてゐることは疑無い、アジアの猫はベルシヤ猫の外、ベンガル猫(一名ヘラモンド猫)バラス猫、サバク猫、ヤブ猫、ナミ猫その他一二種の野猫から出て居り、それ等の後胤間の雜交によつて色々になつてゐるものと見られる、日本の猫に就いては研究が乏しい、歐洲から輸入したものはあるが、その數は少い、多くは直接支那から來たものと朝鮮を経て來たものであらうといふ。

種類、普通毛色によつて(一)クロネコ(全身黒のもの)(二)トラネコ(白と茶褐とを混じてゐるもの)(三)マダラネコ(白と黒と



混じてゐるもの)(四)マケネコ(黒と茶と白と混じてゐるもの)(五)シロネコ(全身純白のもの、五種類にわけてゐるが虎と斑と三毛が多い、この毛色による分類法は便利であるが學術上からは更に尾の長短、毛の長短、顔面の状態、毛の斑紋の細別、遺傳の行はれる状況等を精しく調べる必要がある。

猫は同じく家畜でも犬とは違つた點が多く顔は短く頭が丸く顎が短大で咬筋がよく發達して居り鼻の嗅ぐ力は弱いが耳介は大きく又自在に動き耳が聰い、眼も鋭く瞳孔の形は明暗の度によつてかはり一日中では古歌にある如く『六つ圓く五七卵に四つ八つは柿のたねなり九つは針』で、いはゆる猫の眼のやうにかはり、晝は一般にほそく夜は圓い、しかし光の全く無い所で見えないのは他の動物と同じである、舌面には針狀の尖頭突起が並んでゐて、粗く能くわさびおろしに似てをり、肉をしやぶる、背は古來いふが如く猫背でまる

まるしてをるが、背柱に彈力があつて高くはねることができ又高所から落ちた時に害を受けがたい、前足は五、後足は四趾を具へ端には鉤爪を有つ、常は爪を引込めてをるが、餌食を捕る時にはこれを伸出する、臙には軟い膀胱が在つて歩く時音を立てぬ、人家に在つては雜食性で、肉、飯、魚等を混食するが、又往々昆蟲、蟹、蛇、蛙、鳥、鼠を食ひ、健康に有害なものを攝取した時は、草葉等を食つて嘔吐する。

世俗に猫舌といふ通り、熱いものを食はない、普通年三回蕃殖し、牝は一産に五仔、内外を産み、四對の乳嘴で哺乳する、仔は一箇年で成熟する、妊孕期は八週間、壽命は能くわからぬが十六年内外であらうといふ。

猫をかぶる、恩を忘れる、猫婆をきめるとか種々の惡口あるが最も普通な愛獸動物殊に婦女子に愛せられる、鼠を殺して有益であるが魚を取つたり雞を殺したりするので用心を要する、その毛皮は敷物三味線襦袢かけ電氣實驗等に用ひられ腸からは外科醫が傷口を縫ふに用ゐるたりヴァイオリンに付けたる腸糸を製する。

——大百科事彙——

## 猫の歴史

猫が繪畫となつて我々の目に映するのは、古く古代埃及あたりからであるが、埃及では餘程早くから猫を飼育して居たと見えて、今日でも墓地から猫の死骸を多く發見するとの事である、そして猫が野獸から家畜に馴化せられたのは、犬よりは遅れてゐるが、恐らく四千年以前既にこれが成されてゐたやうである、その埃及人の飼つてゐた祖先は何處から來てゐるのであらう。

ファアブルの家畜の歴史によると、エジプトの南にアビシニアがあり、ここにはグレーハウンド種の祖先だと思はれる野犬が發見されたが、猫の祖先ともいふべきグラヴドキャットといふ一種の野猫も發見された、これは今日の飼ひ猫と非常に多くの類似點をもつてゐるとせられてゐる、その後になつて亞細亞風の第二種の猫が今日の飼ひ猫の系圖に入つて來たのであるといふ、山猫といふものは、今日もなほ棲息してゐるが、これは種々の點

から今日の猫の先祖とは別に考へられてゐる三毛猫といふのは、スペイン猫といはれてゐるが、これは家畜として最も成功したものでこれは猫の祖先たるグラヴドキャットの性質を最も多分に繼承してゐるといはれてゐる。

支那に猫が何時頃入つたか、これは餘り詳かでないが、宋の時代には既に猫の詩が見えてゐるから、餘程古いことであらう、明に入つては一層一般的になつたと見えて、文徵明の『乞猫』の詩には『自緣夜榻思高枕、端要山齋護舊書』の句がある、猫を飼つて鼠を防いだことがわかる。

日本に猫が何時頃渡來したか、菴間の説では人皇六十六代一條天皇の御宇高麗より經文佛具と共に一番ひの猫を將來したのをはじめとするやう傳へられてゐる、これは小右記あたりから出てゐるのであらう、併しそれより八代前の『宇多天皇記』には、既に天皇が先帝(光孝天皇)から賜はつた黒猫を愛撫せられて

ゐることを記されてゐる、此の記の中に、『能く夜鼠を捕ふ、他の猫に擬んず』の文字がある處を見れば、或は光孝天皇以前に渡來したのではあるまいか。

併し萬葉集には猫の歌を載せず、日本書紀等にも猫のことは現はれてゐないから、平安朝の初期に渡來したものと思ふ、だから、猫のこの物繁く現はれるやうになつたのは、平安朝文學からで、源氏物語若菜の卷にある女三宮の猫や、枕草子に現はれたもの又今昔物語にあつた猫の太夫の話などこれ證するものであらう、鎌倉時代には、西行法師のことをはじめとして『吾妻鑑』などに散見するし、夫木集からは猫の歌も現はれて來た、三毛猫などの渡來は恐らく徳川時代になつて來てからであらう。

西洋ではフランスをはじめ猫は到る處に愛玩されるやうになつたが、ナポレオン一世は大の猫嫌ひで、寢臺の下に猫の居たのを見て大に驚き悲鳴を擧げたなどいふ逸話が傳へられてゐる處を見ても、その一斑がわかるであらう。

K231  
35



猫の文獻抄

箋注倭名類聚抄

猫、野王案、猫、音苗、爾古麻、下總本有和名二字、與三河海抄引此合、本草和名同訓或省云爾古、新撰字鏡、狸、爾古、按狸一名猫、見本草和名、似虎而小、能捕鼠爲糧下總本句末有者也二字、今本玉篇大部作猫食鼠也、慧琳音義一引、作猫似虎而小、人家所養畜、以捕鼠也一引、作似虎而小人家畜養令捕鼠一引作猫如虎而小、食鼠者也、各有小異、郊特云迎貓爲其食田鼠也太平御覽引尸子云使牛捕鼠、不如貓之捷、莊子秋水篇云、騏驎驪、一日而馳千里、捕鼠不如狸、爾雅翼、貓、小畜之猛者性陰而畏寒、雖盛暑在日中不憚鼻端四時冷濕、惟夏至即溫、日晴早晚員、日中如線就陰則復員、李時珍曰、貓捕鼠小獸也、處々畜之、有黃黑白駁數色、狸身而虎面柔毛而利齒、按說文無貓字、爾雅戲貓

說文引作戲苗、則知古借用苗字。

狩谷披齋

東雅

猫、ネコマ、倭名抄に野王が説を引て猫ネコマ似虎而小、能捕鼠と注せり、ネとは鼠也コマとはコマといひクマといふは轉語也、鼠の畏る、所なるをいひし也、即今俗にネコといふは其語の省ける也。——新井白石——

和漢三才圖會

猫 家狸、金花猫(出月令廣義) 猫爲妖者也、音苗、和名爾古萬。

本綱、猫其名自呼捕鼠小獸也、有黃黑白駁數色、狸身而虎面柔毛而利齒、以下尾長腰短目如金銀、及上鬃多稜者爲良、其睛可定時(子午卯酉)如二線、丑未辰戌如棗核寅申巳亥如滿月、其時々晴形變也(其鼻端常冷惟夏至一日則煖性畏寒而不畏暑、能畫地卜食、隨月旬上下嚙鼠首尾皆與虎同、其

本朝食鑑

子皆能治、又方用故椒末(以水爲丸)、猫雖若其辛味能癒(甚神効)但捉頭引上之、露脚爪者、不治如豎則豕尾根立愈、猫食鳥貝之腸、則耳缺落、往々試之然。三才圖會云、猫耳經捕鼠後則有缺如鐮如虎食人、而鐮耳也、酉陽雜俎云、猫洗面過耳則客至、其黑猫鬚中逆循其毛若火星。

寺島良安

大言海

ねこ(名)、猫、猫、ねこまの下略、寢高麗の義などにて、韓國渡來のものか、上略してこまともいひしが如し、或は云ふ、寢子の義まは助語なりと、或は如虎の音轉などいふはあらじ、又たたけ(家狸と混するは非なり)古くネコマ、人家に畜ふ小さき獸、人の知る所なり、溫柔にして馴れ易く又能く鼠を捕ふれば畜ふ、形虎に似て二尺に足らず、性睡りを好み寒を畏る、毛色、白、黒、黄、駁等、種々なり、其睛朝は圓く、次第に縮みて正午は針の如く、午後また次第にひろがりて晩は再び玉の如し、陰處にては常に圓し。

大槻文彦

孕也兩月而生、一乳數子、但有食之者、俗傳牝猫無牡但以竹箒掃背數次則孕、或用斗覆猫於籠前以刷帚頭擊斗祝電神而求之亦孕、此與以雞子祝電而抱雞者相同、俱理之不可推者也、猫有病以烏藥水灌之甚良、世傳薄荷醉猫死猶引竹物類相感然耳。

猫尿 諸蟲入耳滴入之即出、取尿法以薑或蒜擦牙鼻或生葱紅鼻中、即遺出。夫木 眞葛原下はひありく野ら猫のなつき難きは妹が心か 仲正

萬寶全書云、猫純黃純白純黑佳。

按猫、春日牡喚牝、秋牝喚牡、而乳大抵春秋二度生子、秋子多難育、性畏寒也、凡六十日而産生一七日始開眼經三旬始自食飯(其吸乳之間糞溺皆母猫舐盡令不汚、至獨食物則自行糞處)過一月半猫重可十兩、則離乳能育、凡十有餘年老牡猫有妖爲災者、相傳純黃赤毛者多作妖、惟於暗室以手逆撫背毛則放光、或砥油者、是當爲惟之表也、凡犬每嫉猫睡殺、不欲乞其肉止殺棄耳、不如猫嗜鼠也。凡病猫用烏藥或生硫黃汁或鯀魚泥鱈天蓼

『小右記』曰、長保元年九月十九日者、内裡御猫産子女院、左大臣右大臣有産養事、復重梳飯納筥之衣等云々、猫乳母馬命婦、時人咲之、奇怪事也、云々、未聞禽獸用人乳、嗟乎とみゆ、衛懿公が鶴を愛せしも同日の談なり。『鴛鴦偶筆』前朝大内、猫犬皆有官名、食棒中貴、養者常呼猫爲老爺また『狐臈』にも、合肥宗伯が夫人愛する猫斃れたるに、沈香にて棺をつくりて壅め僧十二人を延き三晝夜道場を建しことなども見ゆ『枕草子』うへにさふらふ御猫はかうふり云はりて命婦のおもととていとおかしければかしつかせ給ふ、『源氏』若菜下、ねうくといとらうたけになく『花鳥』に猫字の音めうなり、ねうは五音通するなり、漢土にて猫と名づけしもさる心にあ、爰にてねこといふは、それとは異なるべし、猫も杓子もといふ諺は猫のちよつかい杓子に似たれば云なり、ちよつかいは一能搔なるべし、『洛陽集』

ちよつかいにたつ名ぞ惜き猫の夢 友吉

これは柏木と女三の宮の事をいふと見ゆ。猫に袋蒙らす戯古き戯畫に見えたり『安布良加須』音にきく猫の耳とは是やらん、袋の貌をはじめてぞ見る』袋は母のこともかねていふにや。——喜多村信節——

嬉遊笑覽

平野必大

源順曰、似虎而小、能捕鼠爲糧、必大謂、本邦古來、宮中多愛之、頸纏錦繡、著金鈴、或名之以美稱、喚、懷抱弄之、有黃白黑駁數色、狸身虎面、柔毛利齒、以長尾短腰、上鬃多稜者爲良、能捕鼠、凡捕鼠得一、先嚙而半殺、又捕他鼠如初、鬚雖當數十、亦不倦、此俗稱逸物、若得一先食盡之、而及他者次也、其中有不喜捕鼠、惟晝夜潛行、窺雞鴨鳩雀之雛、竊殘肉餘腥之肴者、此猫中之貪賊而不足言、若斯之類、必性如愚、而偷人之眼以捕物去、潛器之陰處而不出、故俗稱人之匿心中之貪欲而不露于外者、曰猫根精也。

冬至後初乳、至夏至後、孕而生子、此號夏子、初秋後、初乳、至初冬後、孕而生子此號冬子、兩月而生、一乳數子、後有自食者、此畜類性也、春雄呼雌而乳、秋雌呼雄乳、是陽升迎陰、陰下與陽之義乎。



## 黒猫御愛撫

六日(寛平元年二月)朕閑時、述<sub>レ</sub>猫消息曰  
驪猫一隻、太宰少貳源精、秩滿來朝所<sub>レ</sub>獻<sub>レ</sub>於  
先帝、愛<sub>レ</sub>其毛色之不類、云々、皆淺黒色也、  
此猫獨深黒如<sub>レ</sub>墨、爲<sub>レ</sub>其形容、惡似<sub>レ</sub>韓盧、  
長尺有五寸、高六寸許、其屈也、小如<sub>レ</sub>米粒、  
其伸也、長如<sub>レ</sub>張弓、眼精品、如<sub>レ</sub>針毛之亂、  
眩鋒直豎如<sub>レ</sub>起上、之不搖、其伏臥時、團圓  
不見<sub>レ</sub>足尾、宛如<sub>レ</sub>堀中之玄壁、其行歩時、  
寂寞不<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>音聲、恰如<sub>レ</sub>雲上黒龍、性好道行  
暗合<sub>レ</sub>五禽、常低<sub>レ</sub>頭尾、著<sub>レ</sub>地、而聳<sub>レ</sub>背脊、高  
二尺許、毛色恆澤、蓋由<sub>レ</sub>是乎亦能捕<sub>レ</sub>夜鼠、  
擬<sub>レ</sub>於他猫、先帝愛<sub>レ</sub>翫數日之後、賜<sub>レ</sub>之于朕、  
朕撫養五<sub>レ</sub>年于今、每日給<sub>レ</sub>之以乳粥、豈嘗  
取<sub>レ</sub>材能翹<sub>レ</sub>擬、因<sub>レ</sub>先帝所賜、雖<sub>レ</sub>微物、殊有<sub>レ</sub>  
情<sub>レ</sub>於懷育、耳、仍曰汝含<sub>レ</sub>陰陽之氣、備<sub>レ</sub>支<sub>レ</sub>竅之  
形、心有<sub>レ</sub>靈知、我乎、猫乃歎息、舉<sub>レ</sub>首仰  
睨<sub>レ</sub>吾顔、似<sub>レ</sub>咽<sub>レ</sub>心盈<sub>レ</sub>臆、口不能言。

續々群書類從——宇多天皇御記——

## 銀猫

文治二年八月十六日午尅、西行上人退出づ  
頻りに抑留せらると雖も、敢へてこれに拘は  
らず、二品(頼朝)銀の作り猫を以て贈物に充  
てらる、上人これを拜領しながら、門外に於  
て放遊の嬰兒に與ふ、是れ重源上人の約諾を  
請て、東大寺の料に、沙金を勸進せんが爲め  
奥州に赴く、此の便路を以て鶴岳を巡禮すと。

東鑑——

## 蕃産の猫

阿蘭陀の猫は、總て虎の毛の如し、黒白及  
三毛ならば更に只虎毛の一種にして尤大に、  
尾も長くふつさりとして甚だ見ぐるしきもの  
なり、又、セイロン國より持來る猫は、大に  
して高さ四尺許、總身虎の毛のごとし、雜を  
與ふれば引裂き食ふ事、實に虎のごとし、阿  
蘭陀人、是を虎なりといふ、見るもの虎なり  
と思ひける、或人其鳴聲を聞く時は、全く猫  
なり、靈猫なるべしと云ふ、靈猫にはあらず

又阿蘭陀人云く、『レーウ』と云は獅子の事な  
り、天竺の地方に産す、其大さ犬の如く、總  
身茶色にして長毛、皆ち<sub>レ</sub>れて甚だ勢あり、  
彼の地方希に木の籠に入れて養ふと云ふ、或  
阿蘭陀人の書に云く、『レーウ』上古木の刺を  
掌に貫き去りてやる、故に今に至て木の籠は  
自ら破る事を得ず、餘の籠なれば、即時に打  
破りて去ると云ふ説あり。——中陵漫録——

## 大船の猫

大船には鼠多くあるものなり、往古佛經の  
舶來せし時、船中の鼠を防がんがために猫を  
乘來る事あり、これ大藏經に鼠の付を恐れて  
也、故に四天王寺の太子堂の門に猫を彫物と  
せられ、又東寺の外構へにも猫を彫付らる、  
は、右の故實といへり、扱舶來の猫の胤の殘  
れるをから猫といひて、源氏物語などに見え  
たる是なり、今京都に畜物は大體唐猫なり、  
大阪に飼ふものは和種多し、其證京師のもの  
は尾長し、浪華のものは尾短し、尾の長短に  
よつて見分くべし。

田宮仲宣——愚雜組——

## 女三宮の猫

御几帳どもしどけなくひきやりつ、人け  
近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくを  
かしけなるを、少し大なる猫の追ひ續きて、  
俄に御簾のつまより走り出づるに、人々おび  
え騒ぎて、そよ／＼とみじろきさまよふけは  
ひども、衣の音なひ耳かしましき心ちす、猫  
はまだよく人にもなつかぬにや、つないと長  
くつきたりけるを、物にひきかけまつはれに  
けるを、逃げんとひこじろふ程に、御簾のそば  
いとあらはにひきあけられたるを、とみにひ  
きなほす人もなし、この柱のもとにありつる  
人々も、心あわたししけにて、ものおぢした  
るけはひどもなり、几帳のきは少し入りたる  
程に、うちき姿にて立ち給へる人あり、端よ  
り西の二の間の東のそばなれば、紛れ所もな  
くあらはに見入れらる、紅梅にやあらん、濃  
き薄き、すぎ／＼に數多重りたるけぢめ、は  
なやかに、草紙のつまのやうに見えて、櫻の  
織物の細長きなるべし、御くしのすそまでけ

ざやかに見ゆるは、縁をよりかけたるやうに  
なびきて、すそのふさやかにそがれたる、い  
と美しけにて、七八寸ばかりぞ餘り給へる御  
衣のすそがちに、いと細くさざやかに、姿  
つき髪のかゝり給へるそばめ、いひしらすあ  
てにらうたけなり、夕かけなればさやかに  
す、奥暗き心地するも、いと飽かず口をし、  
鞠に身をなぐる若公達の、花のちるを惜しみ  
もあへぬ氣色どもを見ると、人々あらはを  
ふとも得見つけぬなるべし。

猫のいたくなげば、見返り給へるおも、ち  
もてなしなど、いとおいらかに若くうつく  
しの人やとふと見えたり、大將いと片腹いた  
けれど、はひよらんもなかく、いとかる／＼  
しければ、唯心を得させてうちしはぶき給へ  
るにぞ、やをらひき入れ給ふ、さるは我心ち  
にもいと飽かぬ心地し給へど、猫のつなゆる  
しつれば、心にもあらず打ちなける、まし  
てさばかり心をしめたる衛門督は、胸つとふ

同——若菜下——



## 猫恐の大夫

今は昔、大藏の丞より冠り給はりて藤原の清廉と云ふ者有りき、大藏の大夫となむ云ひし、其れが前世に鼠にてや有けむ、極く猫になむ恐ける、然れば此の清廉が行き至る所々には、若男共の勇みたるは、清廉を見付けつれば、猫を取て見すれば、清廉猫をだに見つれば極く大切の要事にて行きたる所なれども顔を塞けて逃て去ぬ、然れば世の人此の清廉をば猫恐の大夫とぞ付たり、然て此の清廉山城大和伊賀三箇國に田を多く作て、器量の徳人にて有るに、藤原の轉公の朝臣大和の守にて有る時に、其の國の官物を清廉露不成ざりければ、守、何にして此れを責取てむと思ふに無下の田舎人などにも非ず、諸司勞の五位にて京に爲行く者なれば、廳などにも可下きにも非ず、然とも緩べて有れば盗人の心有る奴にて、此彼云て出しも不遺す、何がせましと思ひ廻して、思ひ得て居たる程に、清廉守の許に來ぬ、守、可謀様を案じて、侍の宿

直壺屋の極く全くて二間許有る處に守一人入て居ぬ、然て彼の大藏の大夫此に坐せ、忍て聞ぬべき事有りと云せられたれば、清廉例は氣色慥氣に坐する守の、此く透やかに宿直壺屋に呼び入れ給へば、喜を成して垂布を引き開てゆくりも無く這入たれば、後より侍出來て其の入つる遣戸をば引立てつ、守は奥の方に居て此にと招けば、清廉畏まりつ、居ざり寄るに、守の曰く『大和の任は漸く畢ぬ、只今年許也、其れに何か官物の沙汰をば今まで沙汰し不遺ぬぞと、何に思ふ事ぞ』と、清廉『其の事に候ふ、此の國一つの事にも不候ず、山城伊賀の事を沙汰仕り候ふ間に、何方も沙汰仕り不遺すして事多く罷成にたれば、否仕り不遺ぬを、今年の秋皆成し畢候ひなむとす、異折にこそ此も彼も候はめ、殿の御任には何かでか愚には候はむ、此まで下申で候こそ心の内には奇異く思給候へば、今は何にても仰せに隨て員のまゝに辨へ申てむと爲る物をば、

穴糸借し千萬石也と云ふとも、未進は罷り負なむや、年來隨分の貯へ仕たれば、此まで疑ひ思食して仰せ給ふこそ口惜く候へ』と云て心の中には此は何事云ふ貧窮にか有らむ、屁をやはひり不懸ぬ、返らむまゝに伊賀の國の東大寺の庄の内に入居なむには、極からむ守の主也とも否や責め不給ざらむ、何なる狗の者の大和の國の官物をば辨へけるぞ、前にも天の分地の方に云成して止ぬる物ぞ、此の主のしたり顔に此く慥に取らむと宣ふ、嗚呼の事なりかし、大和の守に成給ふにて思えの程は見えぬ、可笑き事也かしと思へども現には極く畏まりて手を摺つ、云居たるを、守、盗人なる心にて『否、主此く淨く不云ぞ、然とも返なば使にも不會す其の沙汰よも不爲じ、然れば今日其の沙汰切てむと思ふ也、主物不成就して否不返らじ』と云へば、清廉我が君罷返て月の内に辨へ切候ひなむと云ふを、守、更に不信すして云く『主を見進て既に年來に成ぬ、主も亦輔公を見て久く成ぬらむ、然れば互に情無き事をば否不翔ぬ也、然れども只今有心にて此辨へ畢てよ』と、清廉

『何でか此ては辨へ申し候はむ、罷返て文書に付てこそは沙汰し申し候はめ』と云ふ、其の時に守、音糸高く成て、居上て左右の腰をゆすり上て、氣糸糸惡く成て『主、然ば今不辨じとや、今日輔公主に會て只死なむと思ふ也更に命不惜らず』と云て、男共や有ると聲高やかに呼ぶに、一音許に呼べども、清廉聊か動も不爲すして頬笑て只守の顔を護て居たり、而る間侍答へして出來たれば、守『其の儲たりつる物共取て詣來』と云へば、清廉此れを聞て我々は否耻は不見せじ物を、何事をか何にせむとて此は云ふにか有らむと思ひ居たる程に、侍共五六人許が足音して來て、遣戸外にて將參て候ふと云へば、守『其の遣戸を開て此ちへ入れよ』と云へば、遣戸を開るを清廉見遣れば、灰毛斑なる猫の長一尺餘許なるが眼は赤くて琥珀を磨き入たる様にて大音を放て鳴く、只同様なる猫五つ次きて入る其の時に清廉目より大なる涙を落して守に向て手を摺て迷ふ、而る間五つの猫壺屋の内に離れ入て清廉が袖を聞き此の角彼の角を走り行くに、清廉氣色只替りに替て、難堪氣に思

たる事無限し、守、此れを見るに糸借ければ侍を呼び入れて皆引出させて、遣戸の許に繩を短くて繋がせつ、其の時に五つの猫の鳴合たる音耳を驚かす、清廉汗水に成て目を打叩て生たるにも非ぬ氣色にて有れば、守『然ば官物不出さじとや、何かに今日其事切てむ』と云へば、清廉無下に音替つて篩々云く『只仰せ事に隨はむ、何にも命の候はむぞ後にも辨めも候ふべき』と其時に守侍を呼で、『然ば硯と紙とを取て持來』と云へば、侍取て持來たり、守其れを清廉に指取らせて『可成き物の員は既に五百七十餘石也、其れを七十餘石は家に返て筆を置いてよく計へて可成也、五百石に經て髓に下文を成せ、其の下文をば伊賀の間の納所に可成きに非ず、此く許の心にては虚下文もぞ爲る、然れば大和國の宇陀の郡の家に有る稻、米を可下き也、其の下文を不書すば、亦有つる様に猫を放ち入れて輔公は出なむ、然て壺屋の遣戸を外より封結に籠て出なむ』と云へば、清廉『只我が君、わが君然ては清廉は暫くも生ては候ひなむや』と云て、手を摺て宇陀の郡の家に有る稻米三種

の物を五百か方に下文を書て守に取らせつ其の時に守下文を取つれば、清廉をば出しつ下の家に遣りて、下文のまゝに悉く下せて、髓になむ取てける、然れば清廉が猫に恐るを嗚呼の事と思つれども、大和の守輔公の朝臣の爲めには、極めたる要事にてなむ有けるとぞ、其の時人、繚て、世舉て咲合へりとなむ語り傳へたるや。——今昔物語十八——

### 此のねこま

此のねこまは、佛の御別れをも悲しうおもはで、涅槃會の、おんまじらへさへ仕ふまつらぬおどろおどろしき、此の國までも、ともすれば、老いたる猫の野らに住むなどは、人の子を奪ひ、或は人の妻をかどはして、むくつけきものなり。

——鴨長明——四季物語——

天福元年八月二日南都云、猫股獸出來、一夜噉七八人、死者多、或又打殺件數、目如猫、其體如大長。

——藤原定家——明月記——



隨筆に現はれた猫

猫の性

ある人、一疋の鼠を畜ひて猫とともに居らしむるに、日をふるまゝに互にあひ馴れて、鼠も畏れず猫も亦啖ふことを憶はず、却て鼠のまゝなること愚なるもの、如し、思ふにその性のもより鼠を啖はんことを欲はざるにはあらねど、人を畏るゝ事の専なるにあるのみ、願ふにその初め鼠と猫とを馴しむるの時からそめにも猫の鼠を啖はんとすれば、吐り撃たゝきてこれを懼れしむ、かく敵く攻らるゝが心にしみて數月をふるまゝに、遂に猫の心の動くことなく、鼠も亦ならび居ると雖も怖るゝことなきやうになるなり、ここに於て己が鼠なるをも忘るゝも、さもあるべきことぞかし、かくて客至れば主人まつ猫を呼んで座につかしむ、次に鼠を出して猫に頭を下け挨拶をなさしむるに猫これに答ふること慙懃なるが如し、又鼠、一切の肴と酒とを持ちて猫の前に置くに、猫あいさつをして、その肉

を食ふ、應對のしふるまひ、鼠との交り殊にならひあしからず見ゆ、是もと猫の性ならんや、これ性を任けて發さざるは、その人を懼るゝが故なり、鼠のまたならび居て恐れざるは、これ習ひ性となるものなり、夫習ひて性となるものと、性を矯めて人に恐れ従ふものは天地懸隔の違ひといふべく、これによつて猫の性の鼠にしかざるを知れり、『澹園初稿』予嘗て聞るは、鼠に躍を習はしむるには焙爐を火にかけて熱からしめ、さて鼠の後足へ履をはかしてその中に放ち入るれば、前足のみ後跳にて熱きに堪へざれば、やがて起て躍るといふ、後には地にさへ放てば必らず起て跳るといへり、これ禽獸に藝を教へるの術なり。

猫を飼ふもの

猫を飼ふもの、多くは猫をやしなふことをしらず、飯をあたふるに鯉ぶしを入れ、肉味を加ふ、猫は常に厚味を食とする時は、鼠を

取らず、猫は麥を炊きて味噌汁をかけ與ふべしその他の食をあたふべからず、常に肉食にならばすれば、肉なき時は必他の家にいたりて魚肉をぬすめり人を養ふもの、亦然り。

黒猫

めのをんなのわかかりし時、好みて黒猫をかひしこと、年ごろをふるまゝに、その年々にうませし子も多くは黒猫なるをもて、これらのうへは、予もよく知れり、然るに黒猫毎に胸のあたりに月の輪めきたるものあるにあらず、稀にはあるものなれど、そは黒白のぶちなれば熊の月の輪に類すべからず、いかにとなれば熊はすべて雜毛なく猫には雜毛多ければなり、(中略)大約猫の鼠をとるに必先、その吭を拉きて半死半生ならしめつゝ、弄ぶこと半時ばかり、既に啖はんとするにおよびて必鼠の頂より啖ひはじめて扱全身を盡くすものなり、或は巢だちせし雛鼠などをば只一口にくらふことあり、或は多くとり得し時、又は大鼠にして飽く時は、その頭頂より啖ひはじめ、その足より啖ふことは絶えてなし、こ

猫目知時

猫目知時

卯辰戌寅申子 猫睛黒  
酉丑未巳亥午 如圖

右珊瑚代醉に出づ、亦西陽雜俎曰、猫目睛暮には圓にて午には緊欵して線のごとしとも鼻端常に冷也。只夏至一日暖也、其毛蚤鼠を不容。

金澤猫

猫をこまと云又かなと云事、和名抄云、ネコマと訓す、又かなまと云事、二冊金澤文庫に唐より書を渡せし時、船中鼠の守の爲めに唐猫を添渡すを、金澤猫と云しより、金といふとかや。

猫は惡獸

猫は惡獸にて牛馬犬猿雞の類にあらねど、鼠といへる賊獸を征伐する事、猫にしくものなし、禮記に、迎猫爲其食、食田鼠也といひ説苑に麒麟驕倚衡輓而趨一日千里、此疾也、然使捕鼠、曾不如其百錢之狸、云々とある、狸は則猫なり、和名抄に猫、爾古萬、似虎而小、能捕鼠爲糧とあり、家猫ともいへり。

齊藤彦麿 傍廂

は予がさかりなりし時、凡はたとせあまりの程、いくたびとなく見し事なれば遠く書をあさるに及ばず、もし疑ふ人もあらばためし見して予が言の誣へざるを知りねかし。

附けていふ、猫の純黒なるものは尤得がたし、その純黒と見えたるもその毛をわけてよく見れば必白きさし毛あり、よしやさしけなきものは或はその爪の白く或はあなうらの白きあり、かの藥劑に用ふるといふ眞の純黒の得がたきことかくの如し、かゝれば黒猫の胸の白きは偶然たるぶちにして熊の月の輪とは異なり。

猫兒洗面

西陽雜俎に曰ふ、猫洗面過耳、則客至。按に我郷の俗間の諺にては、猫面を洗ひて耳を過ぐれば遠からずして雨ふる候と云ふ。又云、北人曰、猫不過楊子金山、若過金山、則不捕鼠。

吾浪速の墨の江の社前を過ぐれば其猫必ず鼠を捕る事なしと云ふ、此故に己む事を得ずして猫をつれて墨の江社前を通ることある時には、遙かに東へ迂廻して社の後を過ると云

ふ、これ猶彼邦の狐の江南へ渡ること能はず亦我邦の狐の佐渡の國へわたらざるが如きにも似たり。

猫を惱ます童

齊藤謙が註に、靈岸島にすめりしころ、隣の家に伊豆の新島よりめしおける童ありけるが、垣下に猫の晝寢せしを見て息を吹引せるに、やがて猫くるひ出てめぐりなどするを見きうじけり、謙あやしみて、そはなにぞのわざかととひければ、童いらへいふやう、こは猫に限れる事にあらず、何にても生類寢て息を外へ吐くとき、此方の息を吸、彼が息を引くとき、此方の息を吐やりて、かく息を合すこと五度に及ときは、必狂出るなり、五度に満たざらん内、彼が去去などしたらんには狂廻こんすべもなし、五度息を合たらんには狂廻ことうつなし、かくて息を合する間はいつまでもこゑを立すしておなじまに狂居れど、此方の息を止むればとみにもとの如くなりて走行くなりといへりとなん、今按るに狐狸など人をうなすといふもかゝるわざするにや。

長谷川宣成 三餘叢談



### 侍従大納言の猫

おなじおりになく成玉ひし侍従大納言（藤原行成）の御むすめの書を見つゝ、すゞろにあはれ成に、五月ばかり夜ふくるまで物がたりをよみておきるたれば、きつらんかたもみえぬに、ねこのいとながうなりたるを、おどろきて見れば、いみじうおかしげなる猫あり、いづくよりきつるねごとと見るに、あねなる人、あなかま人にきかすな、いとおかしげなる猫なり、かはんとあるにいみじる人なれつゝかたはらに打ふしたり、尋ぬる人やはと、是をかくしてかふに、すべて下すのあたりにもよらず、つとまへのみありて、ものもきたなげなるは、ほかさまにかほをむけてくはずあねおちゝの中につとまとはれて、おかしがりらうたがるほどにあねのなやむ事あるに、物さわがしくて、此ねこをまたおもてにのみあらせてよばねば、かしがましくなきのしれども、なほさるにてこそはとおもひてあるに、わづらふあねおどろきて、いづら猫はこ

ちるてことあるを、などゝとへば、夢に此ねこのかたはらにきて、おのれはしじう大納言殿の御むすめのかくなりたる也、さるべきえんのいさゝかありて、この中の君のすゞろにあはれとおもひ出たまへば、たゞしばしここにあるを、此ごろ下すのなかにありて、いみじうわびしきことゝいひて、いみじうなくさまは、あでにおかしげなる人と見えて、打おどろきたれば、此ねこの聲にて有つるが、いみじく衰成とかたり玉ふを聞にいみじくあはれ也、そののちは此ねこを北面にもいだしすおもひかしづく、たゞひとりたる所に此ねこがむかひるたれば、かいなでつゝ、侍従大納言の姫君のおはするな、大納言殿にしらせ奉らばやといひかくれば、かほをうちまもりつゝ、なかようなくも、心のおもひなし、めのうちつけに、れいのねこにはあらず、きしりがほにあはれや、（中略）そのかへる年（治安三年）四月の夜中ばかりに火のことあり

て、大納言殿の姫君と思かしづきし猫もやけぬ、大納言殿のひめ君とよびしかば、聞しりがほになきてあゆみきなどせしかば、ここのなりし人もめづらかに哀なることなり、大納言に申さむなどありし程に、いみじうあはれにはおしくおほゆ。

—更科日記—

### 枕草子の猫

心ゆくもの  
猫はうへのかきりくろくて、ことはみなしろからん。  
なまめかしきもの  
夏のもかうのあざやかなる、すのとのかうらんのわたりに、いとおかしげなるねこの、あかきくびつなに、白きふだつきて、いかりのをくひつきて、ひきありくもなまめめたり。

—清少納言—

猫、ねはねすみ也、こはこのむ也、ねすみをこのむけもの也、一説、猫はよくねるをこのむの意か、和名抄にねこまと訓ず、まとむと通ず、このむの字を略せり。 —日本釋名—

### 粟津原猫鼠論

夫鼠は靈中の靈なるもの、抱朴子に、鼠の壽二百歳人に憑いてトす、その名を仲といふよく一年中の吉凶及千里の外事をしるといへり、されは世俗鼠をもて大黒天の使者と稱す故なるかな大黒は水徳の神にして北は子の方その色黒く、すなはち水を主る、又本草綱目金石の部に、黄金の氣は赤くして、夜火光及白鼠ありといへり、亦是世俗白鼠を、福の神と稱ふる事、本草の説によれり、かゝれば鼠は靈中の靈なるものにて愛すべき獣ならずやわれをもてこれを見れば、只憎むべき猫なり、蒙貴と異名せられて主の膝に睡れるぞなめけなる、或は碗中の魚肉を奪ひ去り、蟹の饗應を缺して盗人の名を恥ぢず、あるは爐の灰に糞を埋めて十里嗅氣を傳ふ、狎るゝにはやくして忘るゝこと又速なり、三年これを養ふといへども一たび去つてはその主を省せず彼を佞人に喩へたるも又うべならずや、といふ折しも、あるじの法師はささやかなる白張

の燈籠を引提げつゝ、わが庵ちかく歸り來るに二人の行者が縁つらに尻をかけ、聲高やかに相語ふを聞きて、潜にあやしみ、笠を脱ぎて燈籠の火光を掩ひ徐やかに歩みて、背戸のかたより繞り入り、この物語を立聞とは件の二人たへて知らず、山城の行者猫をあしさまにいはれて喜ばず、これを見かへりていふやう夫猫は民家必用の獸なり田夫これを養うて稻穀を守らし山妻これを受けて十二時を辨す、古人五徳を擧げて賞翫いとふかし又米翼に云く猫睛は十二時を辨す、子は時の先なりこのゆるに猫は鼠をもて食とすといへり、詩人猫を賦して將軍と稱へ英雄小人を罵りて鼠輩と卑む、かくてなほ鼠に勝れりといふやと曰へば、義高頭をうち振りて女三の翠簾をもれ出て、淫奔の媒せし昔物語はあれど佛縁うすくして釋迦の涅槃に參りあはず、佞者の時を得かほなるも一朝籠衰へては、草野猫となり下り、宿なし猫と賤めらるゝ、それにまされる鼠

の徳、窮鼠却つて猫を食む、眞如此といきまきて、胸さかとして引きよするを左右へふつと拂ひのけ、直につけ入る手首を振りもちてもろ共に庭へひらりと飛下りて、打ちつ打たれつ追ひかへしつゝ、しばし挑みある程に義高の懐よりはらりと落つる旭の簾を主人の法師拾ひあけて、これなん木曾の白簾といひも果てぬに義高が唱ふる祕文に奇なるかな簾は法師の手をはなれ聞きつゝ、主の懐に入るさの月の影くらし、さては點頭く山城の行者が苞より拔出す刀の光を物ともせず再び唱ふる祕文とともに數萬の鼠忽然と群り出で、裳にまつはり袂に入るをふり落し切り拂へば鼠も人も雲霧と消えて跡なくなりしかば山城の行者は更なり法師も呆れて引提けたる燈籠はたとり落せば發と燃えたつ火光にて二人は面をあはしつゝ、これはとばかり踏み消す燈籠、あやめもわかぬ野干玉の闇の扇を引あけて法師は内に入りけり、彼山城の行者は誰ぞ猫間新太郎光實なり、又あるじの法師は誰ぞ佐藤憲清入道西行なり。

—馬琴—頼家阿闍梨傳—



猫の賦

雞のあしたをつかさどり、犬の夜を守る、なべてかうやうのなれやしなふべきをのたぐひ、あまたなる中に、鳥は心をなぐさめどもすり餌まきゑのわづらはしく、魚は樂をしるといへども、子子すくふにいとまなく、狎は干菓子のあたひに乏しく、猿は風とるてふわさのみ、ともにかへるに損ありて、益なきものなるべし、ここに一の小畜あり、そのかふや、飯をもてず、鮑貝一つ齧ぶし一連にて、一年の儲に事たりぬ、臆に逸物の毛をかくし眼に六の時をきざむ、あら玉の年の始めは、若水に手水つかひて、七くさ爪をとき待るも妻こふ比の心まちにや、たま／＼涅槃會にもれたるは、屈原が梅をわすれたる類にやとおほつかなし、夏は牡丹のかけにねぶりて胡蝶の夢にたはぶるゝも、つひに垣ねにうづまれて隣の藪の笥をやこやしぬらむとあはれなり秋はまた、びの葉にふれて、おのが藥を求め冬來ればかまどに入りて、灰毛の名にかふも

をかし、こまとよび、からとなづけ、とらはまだらに、からすはくろし、しろがねの貌は西行が手にふれ、首玉の綱は女三の宮にひかる、八蜡の祭にあづかりては、くしのなけきをのこし、五の徳をかぞへては彬師かたはぶれをつたふ、昔より國に盜あれば、將をえらびてうたしめ、家に鼠あればかれをやとひてとらしむ、大凡桁をはしるもの、牆に穴ほるもの、けさう文ひきて名をたつるもの、裏くらひて人をかむもの、油なむるもの、器かじるものも、かれを恐るゝ事はなほだしく、ひとたびきつとにらむときは、手足を措くところなし、かれがかたちの虎に似たるも、そのたけくいさめるによれるや、されど虎死して皮をとむれども、鬼のふんどしにかくばかり、むつちの皮は三味ともなりて、なれてむかしのひざまくら、思ひの色音にひかるゝも、またやさしきかたならずや。

太田南畝—四方のあか—

猫の五徳

萬壽寺に彬師といふ者あり、善く諱す、嘗て客に對す、猫その旁に踞す、彬客に謂て曰く、人雞に五徳あることを言ふ、今吾が此の猫も亦これあり、客其の説を問ふ、曰く、鼠を見て挿らざるは仁なり、鼠其の食を奪て之を譲るは義なり、客至て餌を設くるとき、則ち出るは禮なり、物を藏すこと、密なりと雖も、能く竊て之を食ふは智なり、冬月毎に竈に入るは信なり、客之を聞いて、これが爲めに絶倒す。

(原漢文) — 揮塵新譚 —

猫自畫贊

此にふすまの白くて、さう／＼しきに、物書きて得させよとあるに、更に何かかくべしとも覺えず、されど辭して免さるまじきかたを早く知りて、よしさらば、此棚に鼠のあれぬまじなひせむと、おこがましく筆とりて、書いたるは何ぞ、我は猫なりと思へども、大宮人はいかゞいふらん、昔し金岡が畫いたる萩の戸の馬は、よる／＼萩を喰荒したるとか

もしはざる能畫の筆して、四條のすゞみ、清水の花見など、にぎはしき繪の屏風襖にもあらば、あまたの人の夜ごとに出で、扶持方もつきがたかるべし、我が袋戸の猫は、たとへず、けて千歳ふるとも、赤手拭の跡も知らず、よく香の棚さがしもせねば、主の爲は中々心やすき方ならむと、臘月夜にうかれぬのみぞ、玉の扨の底なしとやそしられぬべき、世につたなき筆の、虎をゑがきては必らず猫なりとわらはるれば、われ又猫をうつさば虎にも似るべきを、杓子にはちいさく、耳かきには大きなりと、かの柿の木の昔し咄ならんかくいへば、鼠の爲とても、よしなし事に似たれども、いでや鼠にも白黒の賢愚ありて、子祭の白鼠は主もいさ憎むまじければかしこ

知りてさげぬもよし、心の鬼のわる鼠のみこれだにも氣つかふべきは、落武者の薄の尾を人なりと見る類にて、少はそれよりも近かるべし、さらば牡丹花下に蝶を驚かさむよりは、此棚にねぶりて、かのわる鼠をいましむべしと、彼にしめしの一句に曰く  
のだんすな鼠の名にも甘日草

横井也右 — 鶉衣 —

奥山に猫また

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなると、人の言ひけるに、山ならねどもこれらにも、猫のへあがりて、ねこまたになりて人となることはあなるものを、と言ふもの有りけるを、何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の行願寺のほとりに有りけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべきことにこそ、と思ひける頃しもある所にて、夜ふくるほど連歌してたゞひとり歸りけるに、小川のはたてにて、おとに聞きしねこまた、あやまたす足のもとへ、ふと寄りきてやがて、かきつくまゝに頸のほどを食はんとす、肝心も失せて、防がんとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、『助けよやねこまた、よやく／＼』叫べば、家々より松どもともして、走りよりに見れば、このわたりに見知れる僧なり、こはいかにとて、河の中より抱き起したれば、連歌のかげものとりて、扇小箱など、懐に持ちたりけるも水に入りぬ、希有にして助りたる

さまにて、はふ／＼家に入りにけり、飼ひける犬の、嗜けれど、主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

吉田兼好 — 徒然草 —

猫說

余家苦鼠暴、乞諸人得一猫、形魁然大爪牙銛且利、余私計鼠暴當不復慮矣、以某未馴也繫羅以伺候其馴焉、群鼠聞其聲相與窺其形類、有能者恐其噬己也、屏不敢出穴者月餘日、既而以其馴遂解其維繫、適觀出穀雞鳴啾々焉、遽起而捕之比家人逐得下咽矣家人欲執而擊之、余曰勿痛物之有能者必有病噬雖是其病也、獨無捕鼠之能乎、遂釋之矣己則佻々泯々饑哺飽嬉、一無所爲群鼠、須潛視以爲彼將匿形致己也、猶屏伏不敢出、既鼠覷之益、熟覺其無他異、遂歷穴相告曰彼無爲也、遂偕其類復出爲暴如故、余方怪其然復有半矣、余家人執之至膏數之曰、天之生材不齊有能者必有病舍其病不可用其能也、今汝無捕鼠之能有噬雞之病、眞天下之弃材也哉、遂答而放之。

文清公集 — 鹽尻 —



猫の名作

猫の名作と稱するもの、その數決して少なくない、ここには代表的のものを列擧する、猶猫の繪の中には古來麝香猫もあるもので、これをも此の中に加へて置く。

埃及古代壁畫猫

カイロ博物館

古代埃及では、猫を以て靈獸となしたといふ、猫に關するもの、存在する所以である、その一に卓子下の猫圖がある、卓子の脚の間に猫が居り首の紐が卓子の脚に結んである、彼方には卓上器物に何か盛られてゐる、猫は前肢で紐を弄びながら、後方をふり返つてゐるのであるが、半ば開いて舌を見せた口のあたり、立てた耳、稚拙味を帯びながら要領を得た毛描き、誠に珍とするに足る。

クレタ島壁畫の野猫

アテネ博物館藏  
クレタ文化の代表的作品として、ハーギアトリアダの壁畫の野猫は有名である、ポブラに似てゐる植物を中心に、その間から飛立つ鳥を狙つてゐる圖、鳥の形はや、雉子に似

てゐる、これを狙ふ猫の目の誇張された描法など面白いものである、これが紀元前十八世紀のものといふことも驚異に値する。

徽宗皇帝筆麝香猫

紀州徳川家舊藏

麝香猫といふが形は寧ろ狗子に近い、横物で、三頭をそれ〴〵變つた姿態に描き、右端上方に例の天水の花押があり、御筆の印を捺してある、その毛描きの巧妙さ、將に神品と稱すべきもの、寛文二年の傳來書一卷が添へてある、徽宗皇帝筆の麝香猫と稱するものは此の外に水戸家にもあつた。

毛益筆麝香猫

酒井伯爵家舊藏

狗子と双幅になつてゐる、麝香猫には野菊を配しその姿態活けるが如く真に迫る、松花堂の箱書、宗中の褒詞二通、探幽の外題があり、遠州の所持したものといふ、昭和十一年重要美術品に認定された。

默庵筆猫圖

佐竹侯爵家舊藏

所謂虎猫を二匹、親は後ろを向きて蹲踞し

仔猫は正面を向いてゐる、筆致豪放にして細心、よくその生態を寫してゐる。默庵の傳は詳かでないが、南禪寺の見山崇喜に就いて靈淵と改め、後ち、元に渡つたといふ、畫は牧溪に就いたといふ、成る程その妙趣を會得してゐる、その作多く傳はらず、近衛家の柳鷲と此の猫は有名である。

玉樂筆靈猫圖

徳川伯爵家舊藏

右は親猫に仔猫二匹を描き、遠景に山あり小禽一羽飛び、前景に岩石を見せてゐる、左は眠れる子猫二匹、竹や長春を配しこれに小禽數羽遊んでゐる、靈猫といふのは麝香猫のこと、此の圖極めて謹嚴なる出來である。

沈南蘋筆蜀葵猫兒

岩崎男爵家藏

沈南蘋が花鳥に一種の風格のあるのは今更いふまでもない、此の圖下に描かれた猫も巧みであるし、花も上品で面白く描かれて居る沈南蘋としても代表作の一つに擧ぐべきものと思ふ。

錢舜舉筆猫捕鳥圖

笹川鹿堂氏藏

錢舜舉の筆と稱せられてゐる、鳥を捕ふる猫の意氣込中々旺なものがある、果して錢舜

擧の筆なりや否や、やゝ疑ひなしとせぬが、出來は相應なものである。

許迪筆草花群猫

笹川鹿堂氏藏

絢爛なる畫面を描き出してゐる、また東洋花鳥の一面を見せた、花は虞美人草で、これと猫との調和も面白い。

小栗宗丹筆枇杷猫圖

神戸田村家舊藏

唐畫の影響を受けた形跡は畫面に何れにも觀取することが出来るが、猫を中心に配した枇杷その他の植物も一寸裝飾的味ひがあり、猫の姿態も如何にも脱俗的で面白い。

宗栗筆芍藥睡猫圖

徳川伯爵家舊藏

宗栗は傳説によれば宗丹の子といふ、小栗姓を冒してゐるから或はさうかも知れない、宗丹の作と一脈相通する處があるので面白いが、宗栗の作といふものはあまり見當らない

雪村筆竹小禽猫圖

神戸田村氏舊藏

竹の枝に一羽の標鳥がとまり、一匹の猫がこれを襲はうとしてゐる、筆が暢達して輕快な感じを與へる、猫の姿態が殊に妙である。

渡邊峯山睡猫驚雀

菊池惺堂氏遺愛

惺堂菊池長四郎氏の遺愛の名幅、後ち福田

山王莊主人の手に移つた、湖石の上に雀が二羽居り、下に白猫の眠つてゐるのを窺つてゐる、華山の自賛に曰く

碧眼鳥圓食有魚、仰看驚雀座階春、風漾々吹花影一、任東郊風化驚除。

傲宋人之意於全樂堂南窓時戊戌八月朔二

十有五日

華山外史邊登

とある、華山の作中での代表的のものである

椿山筆猫圖

波多野古溪氏舊藏

親猫が仔猫に授乳してゐる珍らしい構圖のものである、椿山自から此の圖に

皮毛斑駁爪牙堅、食有鮮鱗臥有毯、海容徒能知黑暗、舟人自愛耆鳥圓、磨簪製帶非同品、捕風啣蟬是獨權、却笑老狸誇王面、意遭鼎鑊得盤旋。

といふ罹存齋の詩を題してゐる。

圓山應舉筆睡猫圖

采野爲吉氏藏

この作には應舉自身の落款はないが、作風上充分その遺作と認め得るもので、國井應陽の「祖應舉翁之眞蹟保可以無疑矣、應陽鑑」なる紙中極は正に當を得たものといはねばならぬ、畫は初夏の午下り庭園の一隅でもあら

うか、雪の下咲く所に小猫が一匹無心に睡る靜かな情景を描ける實感のよく現はれた好ましい佳作である。(藝苑聚芳——土居次義)

杉戸猫圖(國寶)

京都天珠院藏

傳山樂と稱せらるゝもの、牡丹を中心に睡猫と蝶とを配してゐるのであるが、その筆は極めて高踏的で然も猫の姿態を寫すに寸分の隙もない、驚くべき寫實感が此の中に藏せられてゐる、山樂と寺傳にはなつてゐるが、恐らく別人の筆であらう。

殷元良神猫圖

尙伯爵家藏

殷元良は琉球の畫人であり、此の作は猫を描けるものとして、亦特殊の位置を保つてゐるもの。

小林清親筆畫室の猫

清親が歐風を取入れた作で、版畫として異彩を放つもの、その寫實が十七八世紀あたりの歐洲の畫を見るやうである。

其の他の作

日光東照宮眠り猫

傳左甚五郎作

菱田春草筆黑猫

文展第一回出品

岸竹堂筆柳に猫

雅邦筆竹猫圖



## 猫の忠節報恩説話

### 主を護りし猫

むすめの十あまり六つ七つになりたるを、月花にもかへじと思ひたるに、としごろかふ猫の、むすめが廁へゆけば、必らずあとよりつきて行く、いかにせいすれどもきかず、繋ぎおくに、廁へ行く時は必らず知りて、猛うなりて、綱くひきりて馳せてゆく、いかにとたづぬれば、廁の中につとつきそひて居侍るといふ、いかにも心のそこ知り難しとて、おやなりけるもの、劍持ちひて、彼の猫の廁へ馳せ行くとき、頭を斬りたれば、その頭廁のうちに入りぬ、彌あやしみ驚きて見れば、その頭廁のうちなる蛇に食ひつきて、蛇は死してけり、さらばそのむすめに蛇の思ひ入りたるを知りて、かくはありけりと、涙おとさぬはなかりしとなり、冤牛とかいふ事、かの國のふみにもありとなり、猫のうらみはいかにといへば、もとより物言ふ事ならぬなれば、

### 殉死せし猫

大坂博勢の内葉山町、鍛冶屋八兵衛が妻、かぎりわづらひて、死すべき程ちかづきし比、久しく飼おきし猫、床のあたりを離れずありしに、病人の曰、我は頓て死するなりなきあとにては、汝を可愛がる人もあらじ、いづくへなりとも行よと口説しかば、打しほれて、かたはらに居たりしが、病人はかなく成て野おくりの件に、奥の跡につき、一町ばかり行しを追反しければ、宅に歸り舌をくひ切つて死したりし、貞享二年十月廿八日の事にて侍りし。

### 生命を守る猫

音し、雷の轟くにことならず、此節寺中には住職と下男ばかり住みて、雲水の旅僧一人とまりて四五日を過し居たるが、此の騒ぎに起きも出でず、住持と下男は燈火を照らして、此是とさばぎけれども、夜中といひ、高き天井の上より生血のした、り落ちけるゆへ、捨おかれず近き傍の人を雇ひ寺男と俱に天井の上を見せれば、彼の飼猫は赤に染て死し、又其傍に隣家の猫も疵を蒙りて半ば死したるが如し、夫より三四尺を隔りて丈二尺ばかりの古鼠の毛は針をうへたるが如きが生じたる怖ろしけなるが血に染まりて倒れ、いまだ少しは息のかよふ様なりければ、棒にて敲き殺し、やう／＼に下へ引おろし、猫をばさまさま介抱しけれども、二疋ながら助らず、彼鼠はあやしかな旅僧の着て居たる衣を身にまとひ居たり、彼是と考へ察すれば、舊鼠が旅僧に化て來り、住職を喰はんとせしを飼猫が舊恩の爲めに命を捨て住職の災を除きしならんと、人々も感じ入り、頓て二匹の猫の塚を立て回向し、鼠も最怖ろしき變化なれば、捨おかれずと住持は慈悲の心より猫と同じ様に

### 西林院の老猫

遠江國榛原郡御前崎といふ處に、高野山の出張にて西林院といふ一寺あり、此寺に猫の墓、鼠の墓といふ石碑二つ有り、そも／＼此の所は伊豆の國石室崎、志摩國鳥羽の湊と同じ出崎にて、沖よりの目當に高燈籠を常燈としてあり、されば西林院の境内にある猫塚の由來を聞くに、或年の難風に、沖の方より船

の敷板に子猫の乗りたるが、波にゆられて流れ行くを、西林院の住職は丘の上より見下して不便の事に思はれ、舟人を急ぎ雇ひて小舟を走らせ既に危き敷板の子猫を救ひ取り、やがて寺中に養はれけるが、畜類といへども必死を救はれし大恩を深く尊み思ひけん、住職に馴て、その詞を能く聞き解け、片時も傍を放れず、斯る山寺にはなかく、能き伽を得たるこちにて寵愛せられしが、年をかさねて彼の猫のはやくも十年を過し、適れ逸物の大猫となり、寺中には鼠の音も聞き事なかりし、爾て或る時、寺の勝手を勤める男が、縁の端に轉び寝して居たりしに、彼の猫も傍に居て庭をながめありし所へ、寺の隣なる家の飼猫が來て、寺の猫に向ひ、日和も宜しければ、伊勢へ參詣らぬかといへば、寺の猫が云ふ、我も行きたけれど、此節は和尚の身の上に危き事あれば、他へ出で難しといふを聞て、隣家の猫は寺の猫の側近くすゝみ寄り、何やら囁き合ひて後に別れ行きしが、寺男は夢現のさかひを覺えず、首をあけて奇異の思ひをなしけるが、其夜本堂の天井にて最怖ろしき物

保延のころ、宰相中將なりける人の乳母、

猫をかひけり、その猫たかき一尺、力の強くて綱をきりければ、つなぐこともなくて放ちかひけり、十歳にあまりける時、夜に入りて見ければ、せなかに光あり、かの乳母、常にこの猫にむかひて、「汝しなむ時我に見ゆべからず」と教へけるは、いかなるゆゑにか、おほつかなき事なり、十七になりける年、ゆかたをしらすうせにけりとぞ。

あるたつとき所にしろねこといふ猫を飼はせ給ひける、その猫、鼠雀などを取りけれどもあへて食はざりけり、人のまへにて放ちける、ふしぎなる猫なり。

鼠の塚を立て法事をせられしが、今猶傳へて此邊を往來の人の噂に残り、塚は二つともこのさびて寺中にあり。子が友人傳庵桂山遊歴の節にかの寺に至りて書きとゞめしをここにいだせり。

### 吉原の猫塚

吉原土手道哲境内にあり、是は新吉原三浦屋抱薄雲といふ遊女あり、此女の猫にて、元祿の頃は、太夫格子京町の女郎は、揚屋人の時猫を懐せ、おもひ／＼の首玉杯付て寵愛す其頃すべて女郎の翫物としけり、此抱えは、京町三浦屋四郎左衛門方抱遊女薄雲といふ女元祿七八年の頃より仕始し事とかや、其角が五元集に

京町の猫通ひけり揚や町とあり、其頃は専ら流行しと見えたり、此猫の事につき尾州頭犬の社と同日の談故しるさす。

### 徳善畜男

文化十三年の春、世に専ら噂ありし猫恩



を報いんとしうち殺されしを、本所回向院へ埋め碑を建て、法名は徳善畜男と號す、三月十一日とあり、右由來之儀は、兩替町時田喜三郎が飼猫なるが、平日出入の香屋某が、日々魚を賣ごとくに魚肉を彼の猫に與へける程にいつとも渠が來れる時には、猫先づ出て魚肉をねだる事なり、扱右の香屋病氣にて長

煩ひしたりし時、錢一向無之難儀なりし時、何人とも知らず金二兩あたへ、其後快氣して商賣のもとでを借らんとて、時田がもとに至りける時、いつもの猫出でざるにつき、猫はと問ひければ此程打殺し捨たりしと、其譯は先達て金子二兩なくなり、其後も金を兩度までくわへて遊出たり、併し兩度ともに取戻しけるが、然らばさきの紛失したりし金も、此猫の所爲ならんとて、猫をば家内寄集りて殺したりといふ、肴屋泪を流して其金子は筒様々々の事にて我等方にて不思議に得たりと、其包紙を出し見せけるに、此家の主が手跡なり、しからば其後金をくわへたるも、肴屋の基手にやらんと猫が志にて日頃魚肉を與へし報恩ならん、扱々知らぬ事とて不便の事を

なしたりとの事なり、後にくわへ去らんとしたる金子をも、肴屋に猫の志を繼ぎて與へける、肴屋も彼の猫の死骸をもらひ、回向院に葬りしとぞ、凡そ恩をしらざるものは、猫をたとへにひけど、又斯る珍らしき猫もありとて皆人感づける。

—宮川舎漫筆—

### ねこのそうし

ねこのそうしといへる繪巻物あり、其中に、慶長七年八月中旬に洛中にねこのつなをときてはなちたまふべき御きたりあり、ひとしく御奉行より一でうの辻に、たかふだを御たて有り、其おもてにいはいく。

一、洛中ねこのつなをとき、はなちがひにすべき事

一、ねこのうかひ停止の事

此むね相をむくにおるては、かたぐさいくわにしよせらるべきものなり、よつてくだんのごとし。

右かくのごとく御せいたう有るうへは、めんくひさうせし猫どもに札をつけて、はなち申せば、猫なのめならずよろこぶで、

ここかしこにとびまはる事、ゆきんといひねずみをとるにたよりあり、ほどなく鼠おちおそれて、にけかくれ、けたうつばりを、はしらすありくといへども、さなりもなくしのびありきのていなり。(下略)

又、僧鼠を叱ることばに、わらはごときひとりほうし、たま／＼からかさ、はりたてておけば、やがてくまもとをくひやぶり(下略)

戯れたる艸子なれども、何ぞ少しは事のありしなるべし。 —太田南畝—二話一言—

### 畫猫虎人

近頃(天明寛政の頃なり)白仙といへるもの年六十にちかき坊主なりき、出羽秋田に猫の宮あり、願の事ありて猫と虎とを畫きて社に一枚づつ、奉納すと云ふ、自ら猫かきと稱して猫と虎とを畫く、筆をもちて都下をうかれありき、猫畫かう／＼といひし也、呼ばれて畫しむればわづかの價をとりて畫く、その猫は鼠を避けしといふ、上野山下の茶屋の壁に虎を畫きしより人もよく知れり。 —同書—

## 猫の怪奇譚

### 狐と踊る猫

高橋司の物語に、天保七年申の七月十四日の夜のことなり、富野の宅のまへにあらはれたる畑あり、厠にゆきて窓より外の方をみやりたりしが、猫ひとつふら／＼と出来る、やがて狐ひとつ来る、かの猫とならびるけるが狐まつ手をあげ乳のあたりとおほしき所にふれ、すこし背をのし、小足にてあゆみ出す猫またその定にして、あとより歩む、六七間もあるはたけをま直にゆく、歸りには常のあしにてふら／＼とものところへゆく、かくすること五六十度にもおよびぬ、そのはせのく所は、月かけにて垣のしま糸はへたるごとくにあり、その筋をゆく也とぞ、そのうち司しはぶきしたれば、おどろきて二疋とも飛さりぬと也、またく狐にをしへられてあるくことの稽古なるべし、このわざ數度におよびてなん、種々の傳授をうくるなるべし。

### 病床に老猫

—西田直養—後金漫筆—

江戸中橋牧町の中島五兵衛といふ者の召仕の五十餘歳の下女、いたく病みしに何國ともなく老たる猫來り枕に倚居けるを人々いぶせく打てどもさらに離れず、病人死すとひとしく行方しらす失せ侍りし。 —新著開集—

### 踊りに誘ふ猫

淀の城下の清養院の住持、天和三年の夏、痢病わづらひ晩方に便にゆかれけるに、椽の切戸をたゞき、これ／＼と呼ぶこゑきこへしに、七八年も飼おきし猫、火燵の上にありしが、頓てはしり出で、鍵をはづしけるに、外より大猫一匹來りしを内に入れ、鍵をかけ、火燵の上に伴ひしに外の猫がいはいく、今夜納屋町に踊あり、いざ行かんと有ければ、されば此ごろ住持の病みたまふて伽をするまゝ、行

く事は成がたしといへば、然らば手拭を借せ、それも住持のひまなく遣ひたまふて、叶はじとておくりかへし、本のごとくに鍵かけたり、住持件のあらましをうかゞひ見たまふて、立かへり猫をなで我伽はせぬとてくるしからず誘に來る所へはやく行け、手拭も得さするぞと云はれしかば、猫はしり出で後又も歸らざりしとなり。 —同書—

### 局に化けし猫

ある旗本家の息女の後見に、然るべき女を尋ね給ひしに、谷中法恩寺の内、教藏坊肝煮にて年倍の局をかへ、手跡など拙からず、歌の道をも少し心得、物ごと鄙しからざれば年を経て仕し、ある夜主人、息女の部屋をのぞかれしに、息女は寢て、局、獨り鐵をつけ居けるが口は耳の根まできれて耳をそらし、てけり、いかせんとおもはれしかど、若仕をんじては悪かりなんと思ひ、明るをまちて局をよび出し、おもふ子細あれば暇とらするなりとありし時、こは思ひよらすの事かな今俄になどかくは宣ふぞといふ顔色、おそろし



かりければ、頓て抜うちに切れしに、大なる古猫にて侍りし、その猫のかきし伊勢物語、その外、草紙ども多く今にありしと云ふ。

——同書——

### 猫多羅天女

越後彌彦のやしろの末社に、猫多羅天女の禿とあり、此はじめを尋るに、佐渡國羅太郡小澤といへる所に一人の老婆ありけるが、折ふし夏の夕つかた、上の山に登りて涼み居けるに、ひとつの老猫きたりて、ともにあそびけるが、砂上に臥まろびてさまふとあやしきたはむれをなせり、老婆もうかれて、かの猫の戯れにひとしく、砂上に臥轉びて是を學びしに、何とやらん總身涼しく快よきほどに又翌晩もいで、此業をなしてけるに、又化猫來りて狂ひ、ともにたはむれつ、斯くのごとく數日におよぶに、おのづから總身輕く、飛行自在に成て化通を得て天に洄溯し地とはしり、倏に隅目ち、はげかしらと成り、毛を生じ形勢すさまじく見る人肝を消して驚くにたへたり、かくて終に廢屋へ虚空にさる、岌

面鳴雷して山河も崩るゝごとく、越後・彌彦山にとゞまり數日靈威をふるひ雨を降しぬ、里人時に丁つて難澁するにより、これを鎮めて猫多羅天女と崇む、これより年毎に一度づゝ佐渡に渡るに此日極めて雷鳴し國中を脅かすこそ、情き景迹なり。

——鳥翠堂北翠——北國巡杖記——

### 老猫變化

或書に云く、遠州寶藏寺の老猫、化して寺僧と成て法問す、獸類集會して寶藏寺と稱して其長たりと云、予が老猫の化して妖をなす事、始は信じがたく諸説を聞て、全く其眞にしかる事を得たり、是故に老猫變化編を撰して好事の談に傳ふ、委しくは本書を見るべし。

——佐藤成祐——中陵漫筆——

### 怪猫奇猫

予再三肥後に至り藤互某翁に相遇して、其封内の奇事を問ふ、此翁樂を尋ねて封内其四郡周く登覽す、猫島には予も至り見る、猫嶽には登る事を得ず、只此翁其奇事を語る、然

れども皆其談此に載せがたし、予が著はす周游奇談に審に載す、猫の怪を爲すもまた甚し、皆人を殺すに至る、予弱冠の時、一の禪僧あり、此僧は本所に在て甚だ長壽にて昔時の事を談る、此僧の近隣に一の老婆あり、猫を養ふ事三十餘、其中、死したるは小き柳行李に入て幾つも棚に上げをき、毎日出し見て又棚に上げをく、死すれば皆如く此、此老婆眞に白髮猫の顔の如し、後に人の爲に殺さる、半日にして老猫となれりとなり、此僧親く見て予に語れり、又遠州寶藏寺の猫は和尚と成て毎夜法問に往く、此談は猫問答と云本にもあり、世人能く知るなり、羽州米澤より小國と云所に行く皆山路にして三里の間に只茶店一軒あり、直に左右前後人倫なし、此茶店に猫あり春に至て毎日山林に入て歸る、又數日にして歸ることあり、己に兒を孕す、其行く處を考へるに、二里餘り外に行て在る事を見る、毎春時をたがはず其處に行くと云ふ、予が知己の某も猫を養ふ、或日二三日見えず、其夜大火に逢ふ、其翌年新に家を作る、人皆悦び移る、此日猫來て又見えず、去年の出たる日を以て

また歸來ると云ふ、其間何處に在るや未だ其所爲を考へず、薩州の谷山と云處の茶店に一猫あり、琉球人持來る、薩州の人、高麗猫と云ふ、總身の毛長じて小犬の如し、目もまた小犬の如く甚だ愛らし、白黒の光澤も拂林狗と相同じ、長崎の吉雄耕牛翁の云く、昔し阿蘭陀人載來る猫あり、甚だ大にして猫豹の如し、毛色黄にして虎の如し、彼の人虎の兒なりと云、或時猫の聲にて鳴く、是を聞て其猫の一種たる事をする、耕牛云、是乃靈猫なるべしと其猫、又載せ返ると云ふ。

——同書——

### 猫のをどり

先年角管村に住給へる伯母夫人に仕る、醫高木伯仙と云るが話は、我生國は下總の佐倉にて亡父或夜睡後に枕頭に音あり、寤て見るに久しく畜ひし猫の首に手巾を被りて立ち手をあけて招くが如く、そのさま小兒の跳舞ぶが如し、父即枕刀を取て斬んとす、猫駭き走て行く所を知らず、それより家に歸らずと、然ば世に猫の踊と謂ふこと妄言にあらず。

——松浦靜山——甲子夜話——

猫のをどりのこと前にも云へり、又聞く光照夫人の(予が伯母稻垣侯の奥方)角管村に住玉ひしとき、仕へし婦の今は鳥越邸に仕ふるが語りしは夫人の飼給ひし黒毛の老猫、或夜かの婦の枕頭に於てをどるま、衾引かつき臥たるに、後足にて立てをどる足音よく聞へしとなり、又この猫、常に障子のたぐひは自ら能く開きぬ、是諸人の所知なれども如何にして開きしと云ふこと知るものなしとなり。

——同書——

### 山猫と紫の猫

故中山備州の領邑常州太田にあり、一年邑に行きし時、鳥銃を持って邑中を獵あるきしが一朝山間の徑路を上るに向より一夫の息を切て走來るあり、近付て何事ぞと尋れば山猫跡より追來れば、逃去ると云ひながら、走行く、外に同行の人ありやと問へば無と答ふ、其うちはや犬より大なる猫の毛色紫なるが牙を露して逐來る、折しも鳥銃には玉込て有しかば立向つて一打に打留たり餘り奇しき物也とて皮を剥ぎ袖無羽織に製し備州着し候るしが、

後に出入の醫者に與へけるを見たりと也、前より肩を越し腰のあたりより尾になり坐すれば尾は席を曳ほどの大きなりしと以上谷文晁の話なり。

晁又曰、獸毛に紫は絶て無きものなるが、奥州の猫には往々紫色あり、その紫は藤花の紫の如し、奥州は養蠶第一の國にて鼠の蠶にかゝる防とて猫を殊に選ぶことなり、上品の所にては猫の價金五兩位にて、馬の價は一兩位なり、土地によりて物價の低昂かく迄なるも咲ふべし、山猫の紫色なるは、若しや人家畜猫の老て山に入し物にやと云ふ、予、先年旅行せしとき肥前の神崎かにて猫の圃中を歩するを見たり、大さ犬ほどありて、尾は長く三毛なり、傍人に猫よ奇きものと云ふ中に數に入りたり猫も大なるものま、あり。——同書——

### 雀と遊ぶ猫

安永年中に、常州下館の民家にて、雀と猫とを養ふ者あり、常に相馴れて相共に戯遊す時に、颯來てその雀を捕へ行く、猫大に怒りて、終日颯を尋ねて、遂に颯を取り來りて主



人に示すと云ふ、又備中の犬も同様の談あり

佐藤成祐——中陵漫録——

### 高須射猫

某侯(鳥井丹波守)の家令高須源兵衛といふ人の家に、年久しく飼ひおける猫、去年(文政七年)のいつの比にや、ふと行方しれずなりぬ、その比より源兵衛が老母、人に逢ふことをいとひて屏風引きまはし、朝夕の膳もその内におし入れさせて、給仕もしりぞけてしたたむるを、かひまみせしかば、汗もそへものも、ひとつにあはせて、はひかゝりてくふ、さてはむかし物がたりに聞きしごとく、猫のばけしにやといぶかりあへる折から、その君のゆあみし給ひて、まだゆかたびらもまるらせざりし時、なにやらん眞黒なるもの飛び付きたり、君こぶしをもつて、つよくうたれしかば、そのまゝ、逃げ去りぬ、その刻限よりかの老母せなかいむといひければ、いよゝうたがひつゝ、親族にかくと告げれば、もののふの身にて、すておくべきにあらず、心得あるべしといはれて、とかくためらふべき

にあらざれば、雁股の矢をつがひて、よく引きつゝ、人して屏風をあげさせれば、老母おきなほりて、むねに手をあて、とても母を射るべくは、こを射よといふにひるみて、矢をはづしたり、又親族にかたらひけるは、それは射藝のいたらぬなり、すみやかに射とめよといはれて、このたびはたちまちにつきて放ちたれば、手ごたへして母にけ出で庭にたふれたり、立ちより見るに、母にたがふ事なし、やゝしばし守り居たれども、猫にもならざれば、こはいかにせむ、腹きりて死なるといふをおしとめて、あすまでまち見よと云ふ人有り、心ならず一夜をあかしたれば、もとかひおける猫のすがたになりぬ、其のちたゝみをあけ、ゆかをはなちて見しかば、老母のほねとおほしくて、人骨出でたり、いかにかなしかりけん、このことふかくひめて、人にかたられれば知る人なし。

評云、この鳥井の家老高須氏は關漢南のしる人なり、はじめは定府なりしが、今は勤番にて、去歲より江戸にありといふ、又當主は今茲十五歳にならせ給ふなり、右の物

## 大猫の怪

常憲院様御遊興遊ばされ候御茶屋跡、御泉水へ美敷き女とやらんと、やんごとなき風の男、小船に乗り顯はれ、夜の八つ時過より七つ時過迄の間、さも面白く唄をうたひたはむれ遊び申候由、其歌は「せうが承るにおでん棹をさしや君かちを取る」と申候由、誠に怪敷き事に御座候と申上げれば、吉宗公御聞遊ばされ、にくき妖怪のする所也、其の歌のせうがおでんと云ふ女は常憲公の御寵愛の女にて、常憲公御在世に彼のおでんに竿をささせ、小船に乗りてたはむれ遊び給ふこと、世の人の知る處なり、かゝるが故に、怪異は狐狸の業たるべし、松下伊賀守(専助といふ人なり)汝罷越してとつくと見すまし、鐵炮にて打留め來るべし、御下知有りける故、松下奉畏候とて、其の夜丑の刻頃に殿中より松下伊賀守拾芻玉二つ込を持參し、御小人目付兩人を召連れ、北指橋御門より吹上十三間御門の内へ入り、竹籤のしけれる中を忍びて御庭

傳ひ、件の御泉水際、繁れる松蔭に隠れ待ちける所に果して水上に小船を浮かめ、男女の姿を顯はして、小歌拍子をとりし所を、能く見すましてねらひ寄り、松下がはなす鐵炮あやまたず、はつしとあたると船はくだけて失せにけり、其の儘伊賀守提灯を燈させて其の近邊を伺ふに、扱こそしとめたり、大きき一丈程ある猫の脇腹へ拾芻玉を打込みけり、猫は忽死して御泉水の際草村に倒れけり、此の段松下言上に及びければ君大に御機嫌能く、時服を伊賀守へ下されけり、此の已後は再び吹上へ妖怪出づること止みけり。

今昔妖談集——

紀州熊野の山陰の洞に、虎のごとくなる獸住みて、里の大狐狸などを捕る事數年におよび、又人をも追ひければ、里人鐵炮にて打てば、足疾く巖窟に潜れぬ、或る者竹の串と輪とを拵へ、とりもちをぬりて穴の前にかけお

語りかたゝいぶかし、もし在所にての事か、さらば昔の事を今のごとくとりなして人のかたり聞かせしに非ずや。

輪池堂——菟園小説——

### 刀を奪ひし猫

觀教法印が嵯峨の山莊に、うつくしき唐猫のいづくよりともなく出で來りけるを、とらへて飼ひけるほどに、件の猫、玉をおもしろくとりければ、法師愛してとらせけるに、祕藏のまもり刀取り出で、玉にとらせけるに件の刀をくはへて、猫やがて逃げ走りけるを人々追ひてとらへむとしけれども、かなはず行方をしらすうせにけり、この猫、若し魔の變化して、守刀を取りてのち、憚る所なくおかし侍るにや、おそろしきことなり。

古今著聞集——

### 猫の蚤取

又五十ばかりの男、風呂敷をかたにかけて猫の蚤を取ましょと聲立てまはりける、隠居がたの手白三毛をかばゆがらる、人、とれと頼まれけるに一定三文づゝに極め名譽に取ける、まづ猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身をそのまゝ、狼の皮に包みて暫し抱ける中蚤どもぬれたる處をうたてがりみな狼の皮にうつりけるを大道へふるひすてける。

西鶴——雜留——

きし、これにかゝり倒れて騒ぎしに、指置ける竹串のもちことゝく取りつきしかば大なる聲して鳴くに、五六町もひびきしかば、人あまた出合ひ打殺しけり、猪ほどありし大猫にて侍りし、貞享二年五月の事なり。

新著聞集——

### 山猫奇猫

下總長篠の方へ行き年魚を取りて石上にて焼きしに右手の山犬に鳴つて獸一疋來たれり其面を見れば猫のごとく、大き小犬ほどあり、船人並に供の者など棟を以て向へば彼の獸、谷を越え大木に上り、猿のごとく木をつたひ逃げ去りぬ、黃頭郎等が曰く、我れ等常に此の山中を通ふといへど、かゝる獸を見る事なし、これなん山猫と云ふものならしと云ふ、左もあらんか。

市井雜談集——

播磨にて猫二疋横ばらひとつにとちつきて、二疋一度に起臥するあり、是は生るゝ時、おや猫血をくらはす暫し捨て置きたるおこたりなりといひし、さもあらんか。

宗祇諸國物語——



麝香靈猫

大槻氏に麝の寫生の圖ありと聞て、これを借て見しに一幅のかけ物に作りて、異獸の形を鄰松がかきたる上に、漢字の文あり、其説に喝蘭の醫者列墨力伊が書中にいへる處によりて圖を作れるなり、此獸は歐邏巴洲の内にはこれなし、但その香を東方の諸國より得て是を用ふる故に、その説と傳へ聞るま、なれど、漢人の諸説に比ぶれば確實を得るに似たり、この故にその説を譯すとて曰く、麝香は、喝蘭には模斯古私といふ、此名もと亞蠟比亞にていふ處也、獸を模斯古私識伊爾、また模斯古私列伊多と云、東方諸國勃烏去大莫臥兒、韃靼に屬する諸州、あるひは百爾西亞、浮鳥敦、榜葛刺、支那、東京等の深山林麓の中に居る、形狀は色澤牝鹿の如く長三四尺許（これは本邦の曲尺に考へ合せて記す下倣之）頭長く耳聳如兔、尾小く横經の肌肉は體に稱へり、脚長一尺許、蹄前後ともに分れ裂毛は他獸よりも厚けれど、但卷毛剛くして

折易し、色緒く白く小股陰に近き處に一囊たれて大さ雞卵なり、其内容虚にて常に血を流す、血液聚る事あり、其時囊中緒膜ありて是を包む、其結成もの即香也、此獸生する國々、秋冬の際雪多く積りて一丈餘に至て數月釋ざる故、麝の食物なく、餓渴して春末に迨び雪とけて食を得れば食ふこと酷し、此時血液多く生じて大熱ある故膽汁のやうなる惡液支體にみち流れて囊に聚りてさの如くなる也是故に春末夏初にこの獸を捕ふれば先その囊を皮ともに剔取、凝血を石上に傾け出して日光に曝す、しかせざれば香氣酷烈してもて扱ひ難し、血乾燥て軽く粉の如く黯赤色になるを候て再びこれを皮膜の中に收め貯へ置て貨賣す、又その血液蘊熱熾盛によりて變じて一膿腫となる事あり、獸その痛癢に堪へず木石などに觸てこれを剥破れば膿血はしり出たるが日に煉きて香と成れるは灰白色なり、是を下品とすといへり、うけがたき事と思ひし

に宇田川氏(養庵)件の本書を見せしかど、おのれ蘭學を知らねば唯その繪ある處のみ翻覽して其説を尋問けるに、明の代の末に紅毛人彼地に行く紀行にて途中經歷せし處聞を録したる也といへり、彼麝香説もその一にて聞謬あらむこと疑ひなし、是は此書中に繪に長槍をもてる人ども群り立るさまをかきたるは、李自成が軍卒なりとぞ、然るに甲冑を被ずみな喝蘭人のさまなり、是を見ても其説おほつかなき事を知るべし、西洋人は究理をむねとすれば、何事も妄りならずと思ふにや、一時傳聞の説によりて圖を押しかりに作れるはいとをかし。

此頃人の語りけるは蘭花摘芳とやらむいふもの近き程に板行する由此圖説もその中に入れたりとなむ。

おのれも又思ふ事あり、必ず識者に咲はるべけれどざりとてやむべきにもあらねば試にいふべし、麝と靈猫とは一物なるべし、これを麝と名づくる事は本草釋名に、麝之香氣遠射故謂之麝といへり、又靈猫とは其狀の猫に似たればや古來靈猫の外に麝といふもの有と思

へるより遂に麝香は定らかならぬものとなりぬ、是を一物といふ事推あての考にはあれど麝香は價高き物ながら世に多くて麝といふ獸は昔より絶て渡來つる事なきは怪し、そはここのみにもあらず別録に、唐天寶中唐人曾一献之、養於園中、一毎以針刺其臍(この臍といへるは誤り也實は香囊なる事下文を見思ふべし)捻以眞雄黃、則臍復合、其香倍于肉臍、此説載在西陽雜俎、近不復聞有之、或有之而人不識矣といへるが如く、眞物は有ながら人のえ知らぬなるべし、廣東新語二十一などにも、雷州産香狸、所觸草木生香、臍可代臍、本草稱靈猫、自屬牝牡者也、また有麝香味甘性溫食之不畏蛇毒、臍名麝香非麝、狸之似麝者也、などあるも本草の説に迷へるもの也、瓊囊抄八卷江師の記を引て云、今繪にかけたる如猫姿して香ばしき獸をば靈猫といひ、又は令猫ともいふ、其陰殊に其香麝香の如し、此獸は雌雄別に无して只陰くほめては牝となし陰を顯はしては牡と成といへり、(中略)其麝香とて日本へ渡るは皆是なり、其別をしらざるものは偏

にこの靈猫を麝香と思へり、尿を拭へる紙も馨しかりし也といへり、此等の説本草の説の誤を受けたるはいふ迄もなし、只靈猫は古くもここに渡りしことを見るべし、多紀氏の醫臍に靈猫を飼置たる事を委く載たり其大略は狀家狸に似て長大なり、頭尖りて耳短く鼻黒く口大に牙強く爪は短くて利からず、毛は茶褐色にて黒き斑あり、尾は虎の如く長し兩陰の間に桃の大きしたる囊一つつきたり、その内に香満ぬれば瘻がりて後足をあけて香囊を壁にも柱にもすりつく、歩く時は常に首と尾を垂る、物に觸れなどし又は打叩きなどせざれば鳴く事なし、鳴く聲は家猫と同じ明障子たてこめて雀を放ち飛せて捕らすれば速にかかりてとり食ふ事いと興あり、この香囊よく見むとて人ふたりみてり先咬まれぬ心かまへして毛氈など打おほひよく提へてみるに囊の口肉薄く左右より覆へり、開きみれば内は底ありて色白し上にむきて針の眼ほどの穴一つあり、これぞ香の洩出る處なりける、其香白塗の如し、竹篋のさきにて取て嗅に麝香と同じ身の臭とは甚く異也、香の色日を経ぬれば

黒く變れり、本草には此獸みづから牝牡となるよしへるは非なり、陰囊の外に香囊ありてよく牝戸に似たれば見誤りてさはいへるなるべし、又糞も濁も香ばしといへるもそら事也といへり、此説も職方外記有山狸似麝といへる事を引用して嗅之如麝などいへる事もみえたれば猶麝を別のものと思へる也、たちぬる年觀物に出し靈猫をまの邊り見て寫置る圖あり、また多紀氏の寫生の圖も借て模せしに異なる處もなけれど唯斑文のみ予が見しより多し、麝字鹿に従ふ故疑ひ多し、思ふに唯その斑文あるに由るにやあらん、犀翁には香麝は臍にあらず狸の臍に似たるものなどいへるものならば、即香狸なるべきを香狸の外にいへるは疑ふべし、必舊説にまよひたる事しるべし、この獸の類にはあらねとこれに龍といふべき事あり、綱目靈猫の條下に文如土狗といへる事あり、また如金錢豹といふ人もありなん(中略)ふるく寫したる靈猫の繪に錢紋の斑あるも見えたり、思ふに麝香は靈猫の香のみに非ず物を加へて製造せしものならむ。

喜多村信節 筠庭雜考



## 猫の畫題風物

### 牡丹に猫

世上に牡丹の下に猫の眠り居る圖をゑがける多し、是亦彼圖の元來の起りに相違せり、彼圖の猫は睡らす筈にてはなし、本右の圖は唐の時、或人ざる能畫師の正午の牡丹を圖し、くれよと頼みしに、右の畫師牡丹をゑがくは易きことなれども日中正午の趣をいかゞして畫き寫さんやと、色々工夫をめぐらして思ひ付き牡丹の傍に猫をあしらひ、其猫の眼を正午の眼にゑがきて、それにて正午の牡丹と云ふ處をあらはせしなり、左すれば右の圖の猫は眼こそ專一の主なるに睡猫にゑがきては何の面白きこともなし。——適庭紀談二——

### 今戸焼の猫

嘉永五年壬子淺草花川戸の邊に住る一老嫗猫を畜て愛しけるが年老て活業もすゝます、貧にして他の家にして餘年を送らんとせし時

その猫に暇を與へ、なくなく他家へ赴きしが其夜の夢中に、かの猫告ていふ、我かたちを造らしめて祭る時は福德自在ならしめんと教へければ、さめて後、その如くしてまつる、夫よりたつきを得てもとの家に住居しけるよし、他人此噂を聞て次第にこの猫の造り物を借てまつるべきよしをいひふらしければ世に行れて、いくらともなく今戸焼と稱する泥塑の猫を造らしめこれを貸す、かりたる人は布團をつくり供物をそなへ神佛の如く崇敬して心願成就の後、金銀其外色々物をそなへて返す、其廓は淺草寺三社權現鳥居の傍にありて、此猫を求むるもの夥し、此事兒女輩といへども心ある人は用ひず、まして大人の駭くべきにあらずといへども此頃ば丈夫も竊にこの猫をかりて祈りけるものあるよしなりしが四五年にして此噂止みたり。

——武江年表——

### 南泉斬猫

南泉禪師は善願といふ、鄭州新鄭の人、唐代の禪師である、南泉斬猫は禪家の公案で碧巖集無門關、從容錄等にこれを載せてゐる、南泉一日東西の堂に猫兒の争ふものあるを見る。直ちに入つて其猫を捕へ、手に刀を執り曰く『大衆道得即故、道不得即斬却也』と此の際物を言ひ得れば猫は救はれるのであるが衆これに對し一人も道ふ能はず、猫遂に斬らる、既にして趙州和尚外より歸る、南泉猫の事を以て趙州に曰ふ、趙州履を脱し頭上に安んじて出づ、前に趙州あらば即ち救はれたらんものといふのである、これを畫くものに富田溪仙の作がある。

### 猫の畫題

牡丹猫雀圖、牡丹睡猫圖、菜苗戲猫圖、猫竹圖、薄荷醉猫圖、芍藥戲猫圖、萱草戲猫圖、石榴戲猫圖、山石戲猫圖、醉猫圖、竹石戲猫圖、芙蓉睡猫圖。

——狩野一溪——後素集——

## 歌舞伎の猫

歌舞伎に現はれる猫では、『獨道中五十三次』の中の『岡崎の怪猫』と、『佐賀怪猫傳』即ち鍋島の猫騒動、『有松染相撲浴衣』即ち有馬の猫騒動と此の三つが先づ有名である。

### 岡崎の猫

岡崎の猫は、鶴屋南北の筆になつた、五十三次の怪談の一つで、三州八橋村の怪猫と鞠子在古寺の猫石の怪とを綯交ぜたもので十二重の怪猫が油を紙める處をやまにして梅壽菊五郎の爲めに書いたものといふ、南北が初め猫の怪談ものを書かうと机へ向つた時飼猫が十二重の官女が檜扇をかざした錦繪を咬へてきた所から胸に浮んだので、それに丁度黄昏時で下女が行燈を灯して油をさす、その顔が火影に物凄く映つた處から怪猫が油をなめる趣向が湧いたのであるといふ、筋としてはあまり複雑なものでもない。

### 鍋島の猫

これは『佐賀の夜櫻』など、も言つて講談種

のものである、鍋島の藩士小森半太夫が親の遺愛の異國種の牝猫に食も與へず虐待した事から猫が怨恨を懷いて、先づ殿の愛妾お政の方を喰殺し若殿の身を危くし、遂に伊藤惣太等の勇士に退治されるといふ筋だが、これを更に複雑にして鍋島家がその主筋に當る龍造寺家を非道に亡ぼした事から後室が之を怨み愛する玉といふ鳥猫に怨念を傳へる、怪猫は小森半左衛門の母やお部屋のお豊の方を喰ひ殺し、お豊の方に化身してお家に祟りをなすといふ筋にした、更にこれが明治になつて『嵯峨奥妖猫奇談』となり重藏寺又七郎が浪島大守と碁を圍み大守の卑劣な勝負で斬殺されたがその亡霊が土藏の壁に現はれる、一方重藏寺の後家お藤が佛の忌日に一匹の猫を助け恨重なる浪島家に祟つてくれと言合める、それが通じて、大守が嵯峨の夜櫻に怪猫が現はれて大守に飛びかゝる、小森半左衛門が危急を救つたが、怪猫はそれから小森の母を喰ひ殺

し愛妾おさよの方を殺しこれに化けて大守を惱ましと、高木三平、伊藤左右三等に退治される筋となり明治十三年市村座で上演された

### 有馬の怪猫

これは蜀山人の『平日閑話』に、その頃有馬中務の家來安部郡兵衛が怪獸を仕留めたといふ説を骨子として歌舞伎に脚色されたもの、有馬家のお抱相撲小野川喜三郎が雷電爲右衛門に晴の勝負に敗けた爲め殿から勘氣をうけたが、有馬家では側室お志賀の方が、殿の寵愛が妾お卷の方に移つたので嫉妬の炎をもちさまゝ手を盡してお卷の方を苛め、お卷の方は遂に自害する、お卷の方の召使お仲は口惜涙に咽んで敵を討ちたいと思つて居る中、お卷の方が命を助けた猫が一念凝つてお仲に乗り移り、怨重なるお志賀の方をはじ小野川が火見槽で怪猫の姿を認め退治して御勘氣が許りるといふ筋、作者は默阿彌で、小野川が我童、お志賀が松之助、お卷の方が半四郎、雷電爲右衛門が家橘、召使お仲が我當であつた。

——歌舞伎細見から——



漢詩の猫

乞 猫 明文 微明

珍重從君乞小貓、女郎先已辨氈氍、自緣  
夜榻思高枕、端要山齋護舊書、遣聘自  
將鹽裏箸、策勳莫道食無魚、花陰滿地春  
堪戲、正方蠶眠一月餘。

猫 兒 宋林 逋

織鈎時得小谿魚、飽臥花陰與有餘、自是鼠  
嫌食不到、莫慚戶素在吾廬。

乞 猫 宋黃庭堅

秋來鼠輩欺猫去、倒篋翻牀攪夜眠、聞道  
狸奴將數子、買魚穿柳聘銜蟬。

醉 猫 圖 金元好問

窟邊癡坐費工夫、倒帳橫眠却自如、料得仙  
師會細看、牡丹花下日斜初。

其 二

飲罷雞蘇藥有餘、花陰真是小華胥、但教殺  
鼠如山了、四脚撩天却任渠。

不 出 金劉仲尹

好詩讀罷倚團蒲、呶々銅瓶沸地爐、天氣

稍寒吾不出、氈氍分坐與猫奴。

標奴畫軸 金王良臣

三生白老與烏員、又現吳生小筆前、乞與黃  
家禮鼠禍、莫教虛費買魚錢。

題睡猫圖 元柳貫

花陰閑臥小於菟、堂上氈氍錦繡鋪、放下珠  
簾春不管、隔籠鸚鵡喚猫奴。

佩文齋詠物詩選

猫 瞿存齋

皮毛斑駁爪牙堅、食有鮮鱗臥有毯、海客徒  
能知黑暗、舟人自愛青烏圓、磨簪製帶非同  
品、捕鼠啣蟬是獨權、却笑老狸誇王面、意  
遭鼎鑊得盤旋。

猫 ボードレール

來れわが麗はしき猫、わが戀の炎る心に

汝が趾の爪をかくして

金銀と瑪瑙の混れる、まぐはしき眼の中に

わが體、投げ入れしめよ。

しなやかなの圓き背と、頭とをゆるくくりに

わが指の搔撫つるとき

あるは又稻妻はらむ肉體を我手に觸れて

よろこびに酔ひ痴れるとき。

吾妹子を心の中に我は見る、その眼相は

汝のごと、めぐき動物

奥深く冷やかにして、投槍と切り劈きて

頭より足のさきまで

鋭き氣、奇し、危き身の香、栗皮色の

その肉の四方にたゆたふ。

月と猫

櫻の木の間を漏る月の影は震ひて座に落ぬ

誰がみるなけし魂のかた碎けそとそも小猫

白き小猫は走り來てたゞつく然と見守りぬ

泡と粒立ち玉と散り散りては集ふその碎け

白き小猫はざればみて掴むとすれば手を照

りぬ。

月と猫とはその夜よりわが座を和す靈なり

き。

岩野泡鳴

猫の和歌

よそにだによともしらぬ野ら猫のなく音  
は誰に契りおきけん 寂蓮 法師

眞葛原したはひありく野ら猫のなつけかた  
きは妹がころか 源 仲正

敷島の大和にはあらぬ唐猫の君が爲にも求  
め出でたる(夫木抄) 花山院御製

杖笠の外に何をかから猫の火とりの灰のか  
ゝる身にして 上田 秋成

たが家をはなれてここに迷ひこしとむむ一  
夜に馴るゝから猫 同

埋火に夜がれせすなる老猫ま羹にぬるゝ妻  
ごひはせで 井手 曙覽

かた／＼に引わかれつゝ猫の子のむれと遊  
べる夢や見るらん 小澤 蘆庵

から猫の聲うらがなし敷島のやまとにあら  
ぬつまや戀ふらん 同

猫の子は鼠とるまでになりけり何にくら  
せし月日なるらむ 同

梅が香に閉さぬ外面を唐猫のしのひて過ぐ

る夕月夜かな 尼蓮月

つかれたる親の老猫仰寝ておのが乳ぶさを

子に任すなり 大隈 言道

草の實をわが身につけて猫の子の何としも

なしにあるかわりなき 同

おのが身をやくことしらで猫の子も妹がた

く火によるの初霜 同

猫の子の首の鈴が音かすかにも音のみした

る夏草の庭 同

猫はみな老なりけりな春雨のすこし寒きに

火をば離れず 同

さしなみの隣の人の置去りし猫が子を産む

吾家をに 伊藤左千夫

わが庭の萩の花敷の下にしもこほろぎを追

ふあはれ仔猫は 島木 赤彦

萩が根に動くこほろぎを覗ひても仔猫はあ

はれ居眠りにけり 同

猫の舌のうすらに赤き手さわりのこの悲し

さを知りそめにけり 齋藤 茂吉

伽羅ほくに伽羅の果こもりくろき猫ほそり  
て歩む夏のいふきに 同

野ら猫の尾を吊し持ちまふたつに斬れとこ  
そ心しづまりにけり 與謝野 寛

しろき猫春夜はねむる爐のほとり疊につけ  
ぬ肉あかき耳 北原 白秋

春ながら夜ごと空ゆく風さきをうつら眠ら  
ず眉しろき猫 同

青梅の幹かき立つる母の猫仔猫は飛べる蝶  
を見あけぬ 同

膝にねむれる兒猫のころころにも觸れぬやう  
心悲しき冬の日だまり 若山 牧水

猫が踊るに大ぐちあけて皆笑ふ父も母も我  
も泣き笑ひする 同

水鉢に蹲り見入る小き猫赤き金魚のあらは  
れ沈む 窪田 空穂

猫飼はゞその猫がまた争ひの種となるらむ  
悲しき我が家 石川 啄木

板縁に香の骨をはりはりと囓む猫のをり雪  
の夜ふけに 持田 勝穂

どうだんの素枯れ冬めく日のあたり思ひま  
うけぬ猫がきてをる 富倉 良子



# 猫の俳句

春

古猫の相伴にあふ卯杖かな  
 猫の目に掛鯛かゝる幾日かな  
 おくれ家や猫にも一つお年玉  
 太郎月猫の家内も殖えにけり  
 宿の猫蓬萊山を守りけり  
 つき倦みて猫に與へし手毬かな  
 老い猫の眼脂ためたる暮春かな  
 花大根黒猫鈴をもてあそぶ  
 猫の目のまだ晝過ぎぬ春日かな  
 猫逃けて梅ゆすりけりおほろ月  
 春の雨あるじは猫でおはすなり  
 梅が香や耳かく猫の影法師  
 ぬつくりと寝てゐる猫や梅の股  
 菜の花の猫のかよひ路吹とぢよ

猫の戀

松飾り二日立たぬに猫の戀  
 出代りにその連もあり猫の戀  
 猫の戀へついの崩より通ひけり

許六 醉佛 一茶 寛愛 八重櫻 放江 鐵楞 茅舍 鬼貫 言水 召波 也董 几董 一茶

夏

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻  
 日南にも尻のすはらぬ猫の妻  
 兩方に鬚があるなり猫の妻  
 竹原や二疋あれこむ猫のこひ  
 足跡をつま戀ふ猫や雪の中  
 京町の猫かよひけり揚屋町  
 聲たてぬ時が別れぞ猫の戀  
 聲真似る小者おかしや猫の戀  
 老猫の戀のまとひに居りにけり

猫の子

猫の子の組んすほぐれつ胡蝶哉  
 猫の子も妻こはぬ間ぞ人の愛  
 猫の子や秤にはかりつゝざれる  
 人中を猫も子ゆゑの盗みかな  
 貰はれて行く猫の子に鈴つけぬ

芭蕉 鬼貫 來山 去來 其角 其角 千代女 太祇 虛子 其角 沾德 一茶 一茶 節子 史登 一茶 許六

秋

また、びに花見顔なる小猫哉  
 張ぬきの猫も知るべし今朝の秋  
 猫の爪く柱も光れ今朝の秋  
 大猫の口稼ぎする刈田かな  
 月更けて猫も杓子も踊かな  
 いとゞ鳴く猫の竈に眠るかな

冬

から猫の糞してゐるや冬の庭  
 親に似て尾長き猫や寒夜の灯  
 のら猫の聲もつきなや寒の内  
 あら猫のかけ出す軒や冬の月  
 初雪を見て戻りけり秘藏猫  
 接客や猫を屏風のもとに置く  
 炭出しに出てもつき来る猫可愛  
 炭賣にそはへて猫のよこれけり  
 ころにやんと猫も並ぶや衣配  
 お仲間にも猫も座とるや忘れ  
 佗ぬれば猫の蒲團も借りにけり  
 赤足袋や這はせて置けば猫舐る  
 一夜さに猫の紙子もやけどかな  
 縫ひあけし布子の上の小猫かな

存養 來山 巢兆 一茶 蕪村 鬼貫 子規 素月 浪化 丈草 一茶 風の吉 也有 一茶 一茶 一茶 丈草 名月

## 藝術資料 第三期 第七冊 要目

口 繪

西村五雲筆 『秋茄子(原色版)』  
 尾形光琳筆 『秋野狐(玻璃版)』  
 岸竹堂筆 『水邊の狐』  
 森 寬齋筆 『菜の花狐』  
 今尾景年筆 『櫻下の狐』  
 森 狙仙筆 『白藏主』  
 六角寂濟筆 『狐草紙繪詞』  
 山川秀峰筆 『安倍野』  
 片山牧羊筆 『おほろ』  
 郷倉千靱筆 『新月』  
 兒玉希望筆 『枯野』  
 竹内栖鳳筆 『狐』  
 森 徹山筆 『月下狸(一)』  
 同 『月下狸(二)』  
 葛飾北齋筆 『狸』  
 木島櫻谷筆 『寒月』  
 橋本關雪筆 『涼宵』  
 總岡神泉筆 『たぬき』  
 岡本東洋攝影 『狐、狸 二面』  
 版畫繪本文福茶釜(扉) 凸版

本文

狐の概説  
 狐の文獻抄  
 白狐玄狐出現  
 國文學に現はれたる狐  
 怨の火(宇治拾遺) 身替り  
 狐(普聞集) 豊樂院の狐(今昔物語) 高陽川(同上) きつねの名(水鏡) 狐人を食ふ(徒然草)  
 妖狐説の淵源(燕居雜話)  
 狐の繪畫  
 謡曲小鍛冶 白藏主  
 狐問答(宮川舍漫筆)  
 狐の和歌と詩  
 狐の俳句  
 狸の概説  
 たぬきの和名と漢名  
 古今著聞集に見えた狸  
 八條殿の老狸 水無瀬池の怪 老狸の手 磔の雨  
 雲津雜志の狸  
 老狸佛と化す(宇治拾遺)  
 狸の雜説  
 腹誠 八疊敷 狸塚 狸の書 狸舟  
 積翠閑話の老狸 文福茶釜 狸の作品  
 狸と詞藻

## 後記

『藝術資料』第三期六冊『猫』をお手許にお届け申上げます。第一にお断り申上げなければなりません。は、口繪の變更二三で、既に豫告したのもありますが、藝苑聚芳で紹介されたものもありません。まだまだ知られぬ二三を加へました。その一が宣宗皇帝の麝香猫であります。この圖は川崎家の藏品で、左の解説があります。此麝香猫は宣徳丙午元年の筆で廣運元寶の印が押し出ている。純白の毛で覆はれたものと思ふに宮廷内に飼育されたのを寫生したらしい用筆は道勁で殊に胡粉を以ての毛描が細巧微妙を極めてある。寔に氣品高い圖である。本文既に印刷出来後の變更なので、ここに解説を載せて置きます。いま一つは大徳寺傳の狩野元信筆で、これも珍品です。麝香猫の藝術に就いては近くその研究の一部を發表したいと考へて居りますが、此の作など誠に貴重な資料であります。文展も時局下に於て開催となり定めし會員の大多數の方々は御製作に御繁忙の御事と察します。酷暑なほ猛威を揮ひつゝある際に御自愛專一に願ひます。時局で愈々材料の拂底暴騰を來し居ります。それでも出版部は非常な犠牲を拂つて續刊して居ります。切に大方の御後援を願ふ次第であります。(編者)

<b>藝術資料</b> 第三期 第六冊 (毎月一回二十日發行)		會員外及分賣 定價 金壹圓貳拾錢 郵税金九錢
三ヶ月 金參圓 六ヶ月 金六圓 一ケ年 金拾貳圓	共 稅 郵	
會 費		
三ヶ月以上御拂込の方を會員と致します御申込は必ず前金に願ひます。振替口座東京四四二四七番か京都一四〇八番芸艸堂宛何れか御利用のこと。爲替は受取局を無指定として、切手代用は必ず一割増の事既納會費は拂戻の請求に應ぜず。		
昭和十三年八月十五日印刷 昭和十三年八月二十日發行		
編輯者 金 井 紫 雲 發行所 山田直三郎 印刷者 須磨勸兵衛 印刷所 京都市下京區西洞院七條南八 内外出版印刷株式會社	發行所 合名 芸艸堂 京都市中京區寺町二條南(電話上二九〇八番) 京都市本郷區湯島一ノ一(電話下三三六〇番)	





行刊堂艸芸 會合  
社名